

国立 国会 図書館 月報

NATIONAL
DIET
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2023.11



歴史学者 鳥海靖氏に聞く

伊藤博文の文書―研究と編纂を振り返って―

憲政資料室の新規公開資料から

国際子ども図書館展示会「おいしい児童書」

NDL Ngram Viewer を使ってみました

第2回 “ノンポリ” と “非政治” 佐藤信

国立国会図書館 月報

NO. 751
NOVEMBER 2023

CONTENTS

- 1 『海底二万里』
— プラトンのアトランティス —
今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から
- 5 歴史学者 鳥海靖氏に聞く
伊藤博文の文書— 研究と編纂を振り返って —
- 18 憲政資料室の新規公開資料から
- 26 国際子ども図書館展示会 「おいしい児童書」
- 30 NDL Ngram Viewer を使ってみました
第2回 ノンポリと 非政治
佐藤信

- 32 館内スコープ
博士論文デジタル化の片隅で
- 33 本屋にない本
『蘭字知られざる輸出茶ラベルの世界
齋田記念館特別展』
- 34 NDL Topics



表紙：「十二月ノ内 霜月西のまち」から
歌川豊国（3世）画 【葛屋吉蔵】〔嘉永7（1854）年〕
錦絵（37×26cm）3枚続
（『豊国十二月』所収）
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1307012/1/1>

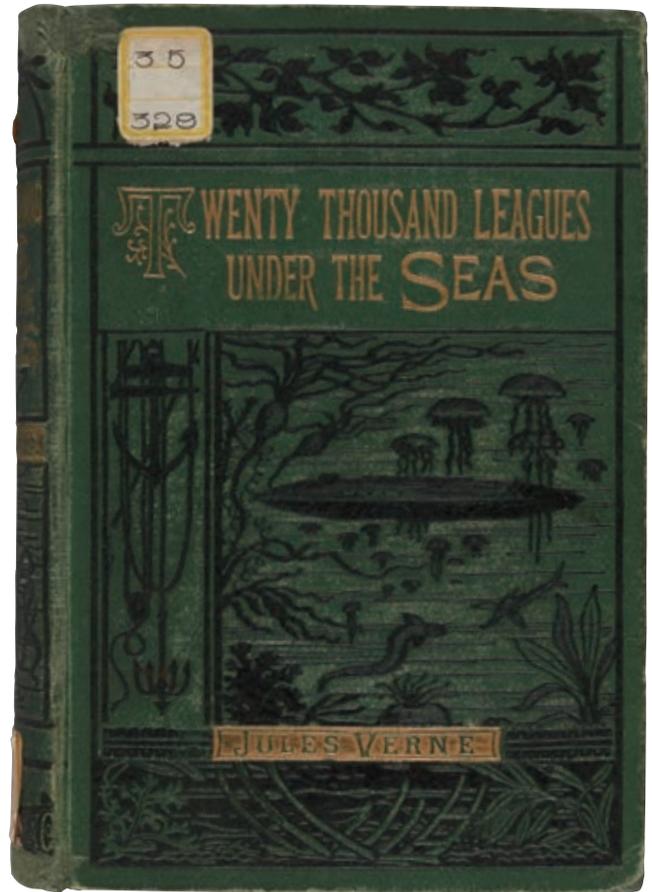
『海底二万里』 —プラトンのアトランティス—

舟口永恭



(上) 潜水艦「ノーチラス号」

(右) ジュール・ヴェルヌ (出典: Wikimedia Commons (https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Félix_Nadar_1820-1910_portraits_Jules_Verne.jpg))



表紙

Twenty thousand leagues under the seas

by Jules Verne, London : Sampson Low, Marston, Searle & Rivington, 1885 303 p.; 21 cm<請求記号 35-328>

『海底二万里』^①は、フランスの作家、ジュール・ヴェルヌ(1828～1905)の科学小説です。1869年から70年にかけて雑誌『教育娯楽雑誌』(Magasin d'éducation et de récréation)に連載され、単行本としても69年に第一部、翌年に第二部が刊行されました。さらに、1871年には挿絵版が刊行されています^②。

産業革命の恩恵が社会に浸透し始めた当時、ヴェルヌは目覚ましい発展を遂げつつある科学技術に着目して、魔法ではなく科学によつて空想を広げ、数多くの物語を執筆しました。後にサイエンス・フィクションの父と称えられるヴェルヌの著作は世界中で人気を博し、UNESCOの翻訳図書出版目録データベースの第2位にランクされています^④。『海底二万里』は、そんなヴェルヌの代表作です。

物語は1866年、大西洋や太平洋で正体不明の巨大な物体が目撃され、世間を騒がせるところから始まります。未知の巨大生物と思しきこの脅威を取り除くため、海洋生物の専門家であるアロナックスを乗せた軍艦は航海に乗り出しました。しかし、巨大生物と遭遇した一行は、その素早さ、頑丈さに歯が立ちません。その正体は、ネモ船長という謎めいた人物が操る潜水艦「ノーチラス号」でした。アロナックス達は翻弄される軍艦から投げ出され、漂流していたところをネモ船長に



アトランティスでの滞在時間はわずかで、一行はすぐに南極方面に出発します。画像は南極点に旗を立てるネモ船長。



ラファエロ「アテナイの学堂」に描かれたプラトン。左手に抱えているのは『ティマイオス』。(出典：Wikimedia Commons (https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Raffael_058.jpg))



アトランティスの遺跡

救助されます。こうして彼らは、ネモ船長の世界周航に同行することになります。

この旅の途中、彼らは大西洋の海底遺跡に立ち寄りました。太古の昔、一昼夜で海に呑まれたと伝わる大陸アトランティスです。この遺跡探訪の場面は短く、本稿で取り上げる一冊でも、10頁未満の短い一幕に過ぎません。しかし、ネモ船長一行が海底火山の閃光に照らされるアトランティスを一望する様子は、刊本によっては挿絵付きで描かれ、読者に強い印象を残すことになりました。この描写が後世に与えた影響は大きく、『海底二万里』は、それまで古典に精通した人のみが知る存在であったアトランティスが、広く大衆に認知されていく転換点となります⁽⁵⁾。

『海底二万里』での描写の中で、この遺跡は「プラトンのアトランティス」と呼ばれます。これはアトランティス伝説の情報源が、紀元前4世紀ギリシアの哲学者プラトンの『ティマイオス』と『クリティアス』であるためです。プラトンによれば、当時のギリシアからさらに遡ること9千年の昔、大西洋の大陸アトランティスは、海神ポセイドンの子孫に統治され栄える強国でした。しかし、神の血を引き聡明であった支配者達は、人間との混合が進むにつれ次第に即物的欲求に囚われ、地中海全域を支配せんと侵略に乗り出し



(上) ノーチラス号の図書室には、一万二千冊の蔵書が収められていました。
 (右) ノーチラス号の攻撃で沈む列強の艦船。ネモ船長の復讐心は、植民地支配が拡大した19世紀当時の思潮の表れとも解釈できるかもしれません。



ヴェルヌの後年の作品『神秘の島』には晩年のネモ船長（上図左端）が登場し、『海底二万里』では不明だった彼の出自が明らかになります。かつて旅を共にしたアロナックス達についても言及があります。（出典：Jules Verne, *The secret of the island*, tr. from the French by W. H. G. Kingston, London: J.M. Dent, 1879-1885 <請求記号 35-332>）



ます。太古のアテナイ（アテネ）は周辺諸国と団結してこれに抗し、激戦の末、辛くも地中海の自由を守りました。その後、地震と洪水を繰り返す過酷な一日が世界を襲い、アトランティスは海没したとされます⁶⁾。

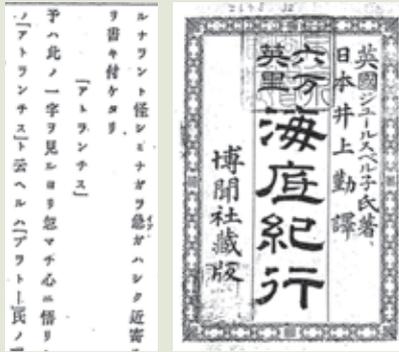
プラトンのアトランティス伝説は、侵略国アトランティスに対するアテナイの抗戦を伝えるものです。そして、強国への抵抗は、『海底二万里』のネモ船長の精神性とも無関係ではありません。

ネモ船長は、漂流者であるアロナックスを救助し、セイロン島沿岸ではサメに襲われた漁師のために戦う人道的精神を持つ一方で、征服者である列強諸国への激しい憎悪を抱えています。ネモ船長はヴェルヌの後の作品である『神秘の島』で再び登場しますが、ここで語られる来歴によれば、彼はイギリス支配下のインドで王子として生まれ、反乱を主導し家族を失った人物です。⁷⁾『海底二万里』においても、ネモ船長は地上で支配に抗う人々に海底の財宝を提供し、海上で列強の艦船と遭遇した際には容赦なく襲いかかる場面があります。

こうした二面性を抱えるネモ船長は、アトランティスの遺跡で、苔むした石碑の前に無言の恍惚に浸ります。幅広い学問に通じ、自身の設計したノーチラス号に図書室まで備え

アトランティスの広がり

ヴェルヌ以後、アトランティスは様々な形で世界に知られていきました。
当館資料から、その過程の一部をご紹介します。



井上勤 (1850-1928) はヴェルヌの著作を精力的に翻訳し、明治時代における西洋の冒険小説ブームをけん引しました。井上が『海底二万里』を翻訳した『海底紀行 六万英里』は明治17 (1884) 年に刊行され、日本にもアトランティスが知られていくこととなります。

(左) <https://dl.ndl.go.jp/pid/896742/1/210>
(右) <https://dl.ndl.go.jp/pid/896742/1/1>



『海底二万里』後、アトランティスは多くの創作物のモチーフとなっていきます。さらに、その存在を信じる人々の様々な主張も展開されました。

特に、アトランティスの実在を主張するドネリーの *Atlantis: the antediluvian world* や、プラヴァツキーの *Isis unveiled: a master-key to the mysteries of ancient and modern science and theology* などはアトランティスの知名度に大きな影響を与えます。

ちなみにドネリーが自著で示した地図上のアトランティス (左図) は、ノーチラス号の航路 (中央図) 上にありました。

(左) Ignatius Donnelly, *Atlantis: the antediluvian world*, New York: Harper & brothers, [c1882] <請求記号 41-60>

(中央) Jules Verne, *Twenty thousand leagues under the seas*, London: Sampson Low, Marston, Searle & Rivington, 1885 <請求記号 35-328>

(右) H. P. Blavatsky, *Isis unveiled: a master-key to the mysteries of ancient and modern science and theology*, New York: J.W. Bouton. 1886, c1877 <請求記号 96-33>

1 原題は *Vingt mille lieues sous les mers*。邦題は『海底二万海里』や『海底二万マイル』なども知られるが、本稿では『海底二万里』を用いる。

2 邦題は当館所蔵の複製版 (Athena Press, 2008-2018) <請求記号 Z57-A31> の邦訳に倣った。

3 出版情報については次の文献が詳しい。石橋正孝「『海底二万里』改訂作業途中経過」『Excelsior!』3, 2009.3, pp.75-81 <請求記号 Z71-X796>。

4 UNESCO ウェブサイト "Index Translationum." (<https://www.unesco.org/xtrans/bsstatexp.aspx?crit1L=5&nTyp=min&topN=50>) 参照。なお、第1位はアガサ・クリスティ。最終アクセス日: 2023年9月19日。

5 ロナルド・H. フリッツェ (尾澤和幸訳) 『捏造される歴史』原書房, 2012, pp.51-52 <請求記号 G11-J23>

6 田中美知太郎・藤沢令夫 編『プラトン全集 12』岩波書店, 1987, pp.22-24, 234-249 <https://dl.ndl.go.jp/pid/12263154/>

7 『ヴェルヌ全集 第22』集英社, 1969, pp.236-238 <請求記号 953-cV53v>

○参考文献

『ユリイカ』9(5), 1977.5 <請求記号 Z13-1137>

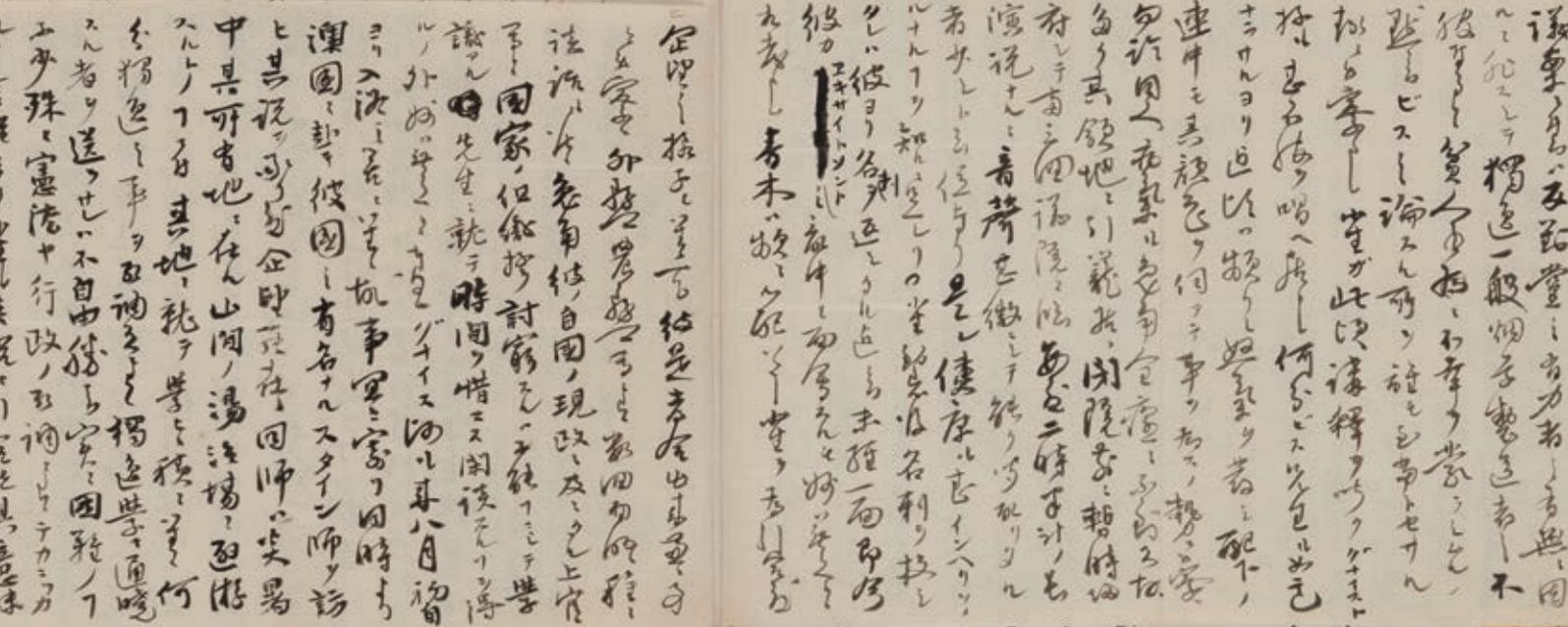
『日本児童文学』24(6), 1978.6 <請求記号 Z13-450>

『イメージの博物誌 28』平凡社, 1994 <請求記号 SB391-123>

『Excelsior!』5, 2011.5 <請求記号 Z71-X796>

ていた彼は、プラトンのアトランティス伝説もまた熟知していたことでしょう。その伝説は、彼が訪れたアトランティスが、地中海世界を脅かした過去を伝えていきます。そして、アトランティスの侵略に抗った地中海世界は、欧州諸国のルーツともいえる存在です。ネモ船長の祖国を支配下においた欧州列強にもまた、太古の時代、自身の自由をかけた戦いがあった。そんな歴史の命運を想うとき、彼の胸中にはいかなるものであったでしょうか。アトランティスを前にしてこみ上げたその想いが、作中で明確に語られることはありません。

本稿で紹介したのは、刊行年が確認できるもののうち、当館所蔵の挿絵版として最も古い資料である英語版の *Twenty thousand leagues under the seas* です。この一冊を手に取り、プラトンの伝える伝説や、ネモ船長の心の内にも想いを馳せながら、改めてアトランティスの挿絵を開いてみましょう。そのわずかな数頁が、太古から変わらぬ人類がもつ自由への意思を、懸命に叫んでいるように感じられるのは、海底に国の跡を見るかのような、筆者の幻想でしょうか。



歴史学者 鳥海 靖 氏に聞く

伊藤博文の文書

—研究と編纂を振り返って—

当館憲政資料室は伊藤博文旧蔵の文書を所蔵しています。
平成 28（2016）年、当館は、伊藤博文研究の第一人者にして、『伊藤博文関係文書』（塙書房）の編纂にも携わった鳥海靖氏（東京大学名誉教授・元当館客員調査員）から聞き取りを行いました。60 年近い学究生活のお話は、日本近代史研究の軌跡にもかかわるものでした。聞き取りの内容を誌上で公開します。

（文責 本誌編集担当）

略歴

- 1934年1月21日 東京市目黒区に生まれる
集団疎開、縁故疎開のため山梨県、長野県、千葉県の国民学校を転々とし、1953年3月東京都立大学付属高等学校卒業
- 1954年4月 東京大学教養学部入学
- 1956年4月 東京大学文学部国史学科進学
- 1958年3月 東京大学文学部国史学科卒業
卒業論文：大同団結運動の一考察
- 1960年3月 東京大学大学院人文科学研究科国史学専門課程修士課程修了
修士論文：帝国議会初期における自由党の構造と機能
- 1960年4月 博士課程進学（翌年3月中退）
- 1961年4月 東京大学教養学部助手
- 1964年4月 同講師
- 1967年2月 同助教授
- 1972年4月 国立国会図書館非常勤調査員として憲政関係資料の調査にあたる（翌年9月まで）。
- 1973年10月 オーストラリアに出張、オーストラリア国立大学太平洋学研究所極東部門客員研究員（1975年4月帰国）
- 1982年4月 東京大学教養学部教授（1988年より大学院総合文化研究科担当、1994年3月定年退職）
- 1994年4月 中央大学文学部教授（2004年3月定年退職）
- 1995年7月 国立国会図書館客員調査員として憲政関係資料の調査にあたり、「伊藤博文関係文書（その1）」「同（その2）」の書簡の整理等を行う（2000年3月まで）
- 2020年2月29日 逝去



鳥海 靖（とりうみ やすし）氏
写真は『中央大学文学部紀要』通号 201、2004.3 < Z22-418 >

著作

『日本近代史講義 明治立憲制の形成とその理念』（東京大学出版会、1988）をはじめ、多数。『伊藤博文関係文書』全9巻（塙書房、1973-1981）や教科書・事典類の編纂にもかかわった。

今ご紹介いただきました鳥海でございます。随分昔になりますが、「憲政資料室」の非常勤の調査員を大学で教えるかたわらしたことがありまして、伊藤博文文書について色々なことがあるので私も忘れていたことも多いんですけどもね、覚えている限りお話できたらと思っております。

研究の経歴

まず最初に私自身の研究の経歴と、その中で憲政資料室とどういう形で接触するようになったかというそのあたりの話から入らせていただきます。

私が大学を卒業したのは確か1958年で、もう50年近く前になり、それから修士課程に進んだわけで、博士課程の1年目に東大教養学部の助手として駒場の方に移りました。

卒業論文や修士論文で扱ったテーマは、明治の自由民権運動で——その当時は自由民権運動の研究が盛んでしてね——明治政府が絶対主義的専制政府であるというのが通説になっていたわけです。自由民権運動はその打倒を目指したブルジョワ民主主義革命運動であると。私はそういう評価に納得いかなかった。立憲政治の実現という問題は明治の初めに政府側から言い出して

自由民権派が乗る形で両者が競合して、共通の目標であった。明治政府が絶対専制政府という見方に疑問を感じていました。後の政党活動につながるという意味で、議会開設前後の政党のことを取り上げた。「卒業論文で」大同団結運動^②というのを最初にやって、初期議会の自由党を修士論文で取り上げています。

初めての憲政資料室利用

一番最初に憲政資料室に来たのは、大同団結運動について研究するためで、主として使ったのは三島「通庸関係」文書^③でした。三島文書がここに入ってたばかりのことじゃないかな。その当時憲政資料室にいらっしやったのは、大久保利謙先生「職員」や藤井貞文先生「職員」だったかな

藤井先生の方とはあまり接触なかったんですけども、大久保先生は大学の方に非常勤講師で来ておられた関係もあって、色々卒論を作る上でご指導をいただきました。

藤井先生には非常に怒られたことだけ覚えています。資料を見て、間にはさんであつた葉^{しや}だつたか小さな紙を落つことしたんですね。紙1枚、小さなこれくらいの紙1枚。気が付かな



大久保 利謙 氏
(1900~1995)

歴史学者 大久保利謙の孫。1949年から1990年まで憲政資料室の資料収集に携わった。写真は『日本古書通信』28(12) (413, 復刊236), 1963.12.15

< Z21-160 >

かつたものですからそれを落つことして帰ってしまった。その後、藤井先生は大分激怒されていたということの後で聞かされました。「ああいう若い者には資料を見せるな」と言ったという話を後から聞きました。とにかく謝って謝って、見せてもらって。

あの当時はあまり三島文書は使われていなかったものだから。「手書きの文書を」殆ど使わなかったものから手書きの文書を読む能力があまりなかったものだから、比較的読みやすい三島文書の報告書。報告書は大体楷書で書くからそういうものを使わせていただきました。

東大教養学部図書館の副館長となる

その後、博士課程を一年終わったと

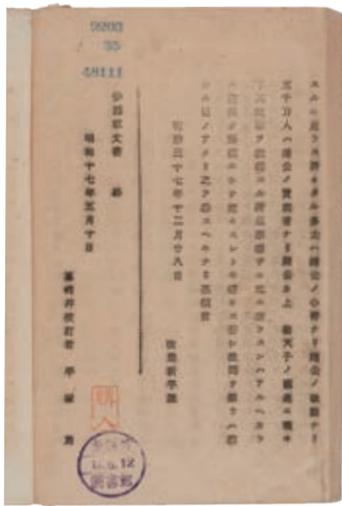
聞き取りの概要と本記事の作成方法

聞き取りの概要

正式名称	近現代政治史料に関する説明聴取会
開催日	平成28(2016)年12月21日
開催場所	国立国会図書館東京本館内会議室
テーマ	伊藤博文関係文書について
話者	鳥海靖氏(東京大学名誉教授・元当館客員調査員)
聴講者	国立国会図書館職員計10名(憲政資料室の業務に携わる職員等)

本記事の作成方法

- ・本記事は、上記の聞き取りにおける鳥海先生の講義形式のお話及び質疑応答の内容を記事化したものです。
- ・講義部分は、間投詞や繰り返し部分を省くなど若干の修正を行っています。
- ・質疑部分は、一部の質問をピックアップした上で、質問の順序及び内容を再編しています。回答部分は一部割愛を行っています。
- ・読者の便のため、小見出し・資料写真・キャプション・ルビ・聞き取りで言及のあった研究者の一覧・註などを補いました。
- ・本文中で編集担当が補った部分は [] 内に記しました。
- ・聞き取り中で言及があった研究者の生年等については、本記事 pp.12-13 をご覧ください。



当館所蔵のタイプ版「伊藤家文書」 <憲政史編纂会収集文書624> 憲政資料室所蔵
平塚篤編。昭和13(1938)～17(1942)年に編纂。当時伊藤家蔵の伊藤博文宛書簡がタイプ版で印刷されたもの。
和綴本全91冊。差出人別に分類されている。右から第1巻表紙、第91巻表紙、第91巻奥付。

ところで助手のポストが空いたというこ
とで、東大教養学部助手になりました。
た。
前任者だったのは、古代史のまゆみ 黛
「ひろみち 弘道」先生で、この方は学習院大学
の助教として赴任されて後のポスト
が空いたということで、当時は近現代

史の人間は殆どいなかったわけでは
新しい助手を採用するのであったら近
現代史の研究をしている人物がいいだ
ろうということ、たまたま私のところ
に白羽の矢が立てられたようで非常
に幸運だったわけですね。その後、3
年間助手を務めて、専任講師にしても
らった。

それで、教養学部図書館の副館長を
一緒にやれということになって、東大
教養学部図書館の副館長になりました。
それがひとつの「伊藤家文書」と
触れ合う最初のきっかけになったわけ
です。図書館の中に、古い文献がたく
さん山のように積んであり、埃にまみ
れて誰も見ていないものがたくさんあ
りました。どういうわけか海軍の経理
学校の蔵書がそっくり図書館に入った
らしいんですね。海軍文庫というハン
コが押してありました。掘り出しもの
はないかって探しました。大学のたいせ 大勢
としてはこういうものは廃棄処分にし
ようなどと、言っていたらしいんです
よね。

タイプ版の「伊藤家文書」を発見

それでも何かあるだろうと見ている
うちに、「伊藤家文書」(写真)が見つ
かったわけです。和綴じの91冊ですか、

「91冊」全部はなかったと思うけれど
も、とにかくそれが埃にまみれて横積
みになって倉庫の中にあっただけね。
それを見て、これは非常に貴重な資
料だということがわかりました。それ
は平塚篤あつたけが編集したタイプ版の資料
で、これは非常に貴重な資料でこんな
ところに置いとくと、埃にまみれたま
ま誰も使わない、下手すると廃棄処分
になってしまおうということで、これは
大変だということで個人の研究室にそ
れを移管してもらって、研究室でそれ
を少しずつ見ていったわけです。

みんな海軍文庫のはんこが押して
あって、海軍の経理学校の蔵書だと後
から聞きました。海軍経理学校の蔵書
が駒場の図書館に入りたいきさつは誰
も知らなかったのですが、個人の研究
室に移管してもらって、ちょうどその
とき、伊藤隆先生「日本近代史の研究
者、その頃東京大学社会科学研究所助
手や教養学部助手を務める」が東大の
社研から一時駒場にいられた時期なん
で、これは貴重な資料だからちよっと
調べてみようや、と、最初は2人で始
めたんですね。

むしろ伊藤博文関係のものは、活字
になった資料なり伝記なりが山のよう
にあり、『伊藤博文伝』3冊、昭和15

年に出されたものが一番伊藤の伝記と
しては大部なもので、一番信頼のでき
るものだった。「その記述が」間違っ
ているのを発見したというのは自慢話
になりますが、私が最初のこともある
かもしれませんが、『伊藤博文伝』には
貴重な資料がたくさん引用されていま
すね。種々の文書、記録類、参考文献。

「伊藤博文関係文書の編纂刊行」について ——伊藤隆氏(歴史学者)の回想

この十年以上に亘る甚だ労力を要する仕事が始まったそもそのきっかけを作ったのは鳥海靖氏で
あったように思う。私が社研の助手になった暫く後に彼は東大教養学部の人文の助手になっ
た。そしてある日彼から、教養学部の古い書庫の古い書庫の中に旧海軍の図書があり、その中に
『伊藤家文書』がかなりあるという話があった。当時、戦前『伊藤博文伝』編纂のために
作成された『伊藤家文書』全九一冊は見られるところがなかった。憲政資料室には全
部揃っていたが、その他には殆どなかったと言って良いであろう。それにこの『伊藤家文書』は
伊藤宛の書簡を人別に配列してあるだけで、年代の推定もしてなかった。それで、別項で述べる
日本近代史料研究会が発足して資金も少しあったということから、彼と再度図書館の中を捜し
回り、相当量の『伊藤家文書』を捜しだし、借り出した。

伊藤隆『日本近代史 研究と教育』[伊藤隆], 1993, p.231 <GB411-H153>

海軍文庫の中の伊藤関係文獻

そうやって色々探していると、旧海軍文庫の中に貴重なものがたくさんあるんですよ。『秘書類纂』(註)「秘書類纂刊行会、1933〜1936」もそこから見つけたんじゃないかな。24冊プラス3冊。日清戦争関係のものも後で3冊追加されたから、あわせて27冊。資料として非常に膨大な資料。

『秘書類纂』は「書類の類が中心ですよね。その他に平塚篤が編纂した『伊藤博文秘録』(註)「春秋社、1929〜1930」が2冊。これは伊藤がメモしたような覚書の類とか、書いたけれども、発送しなかった書簡などが確かあの中に入っていたかと思えます。

その他、小松緑という人が編纂した『伊藤公全集』(註)「伊藤公全集刊行会、1927」。これは伊藤の書簡とか政治演説、学術演説や彼にかかわるエピソード、そういうものが収録されています。3冊あります。そういうものがあった。

伊藤宛書簡の原本調査を志す

問題は、「伊藤家文書」91冊をちよつとこのままにしておくのは勿体ない。非常に使いにくいものですね。発信人が何百何千人といえるのかな、それなの

に誰が発信人であるかきちんと推定してないものもあるし、それから年代が全然推定してないわけですよ、「配列も」ばらばら。明らかに読み間違えだな——タイプ版ですけどね——意味が通らないな、というものも色々ある。これはやはり是非原本にあたって、「伊藤家文書」をもう少し使いやすいものにしよつという、そういうこと。

同世代の研究者との協働

最初は伊藤隆さんと話をしたわけですが、ちよつどあそこには渡辺昭夫さん(註)「国際政治の研究者、鳥海氏と同様東京大学文学部国史学科卒」もいます。我々3人同世代ですが、渡辺昭夫さんは国際関係論のほうにいてしまつたけれども、元々は文学部国史出身の方ですからね、史料を読むことに関心なり興味がある方ですよ。

そういう方々と語らつて、それから大学院生に坂野潤治さん(註)、3年位後輩になるのかな。それから酒田正敏さん(註)、あの方はその当時都立大学の大学院の学生だったのかな。あの方は、直接どういふことで知り合ったかよく覚えていませんが、とにかくそういう人たちで色んな研究会をやつたんですよ。

洋書を読む研究会もありました。そ

れから昔の史料を読む研究会もあつて、私の研究室でやつていたと思うけど、もう一人、山口利昭さんという法学部の大学院生だった方「も一緒」ですけども、とにかく全部で数人が集まつて、この「伊藤家文書」をもう少し読みやすいものにしていこうじゃないか、出来るだけ原本にあたって、ということ、憲政資料室の伊藤宛の来

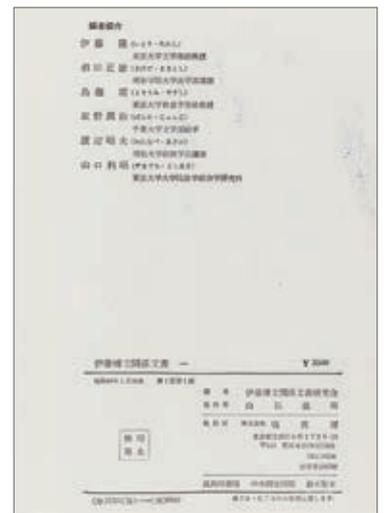
簡「伊藤博文関係文書」(その1)を、ここで原本があるものは原本にあたり、原本がないものはしよつがない、活字化された中にその手紙がそつくり引用されているものがあるので信頼できそうなものを使つたんですけど、原本があるものは全部原本で見ました。

その他に原本があるものが、当時、山口県の大和町「現・光市」に伊藤公資料館(写真)というのがあり、これは原本のものもいくらかありましたけれども、家族宛の手紙が残つていて、あとそれに関連した資料の筆写がたくさんありましてね。憲政資料室にもありますね、筆写は。だけど憲政資料室

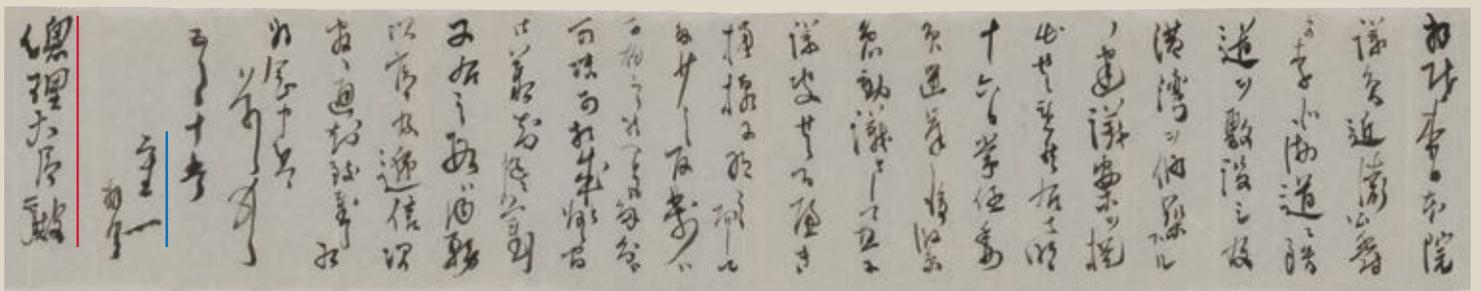
のは封筒とかが入つてない。伊藤公資料館のほうには封筒とか宛先とかメモみたいなものは封筒に書いてあつて、筆写されて残っていますよね。今はわかりませんが、それこそ20年くらい前の



現在の伊藤公資料館(山口県光市)
初代内閣総理大臣・伊藤博文の遺品等を展示して業績を紹介するとともに、幕末から明治末までの日本の動きを学習する場として開設。伊藤が神奈川県大磯の別荘「滄浪閣」で使用していた家具や、大礼服などの衣類、硯や筆、常に持ち歩いていた念持仏、昭和38(1963)年に発行された肖像入りの旧千円札の第一号券等を展示している。
写真提供: 光市教育委員会



『伊藤博文関係文書』第1巻, 塙書房, 1973 奥付 < GB415-21 >



▲ 書簡原本(オリジナル) 現在憲政資料室所蔵

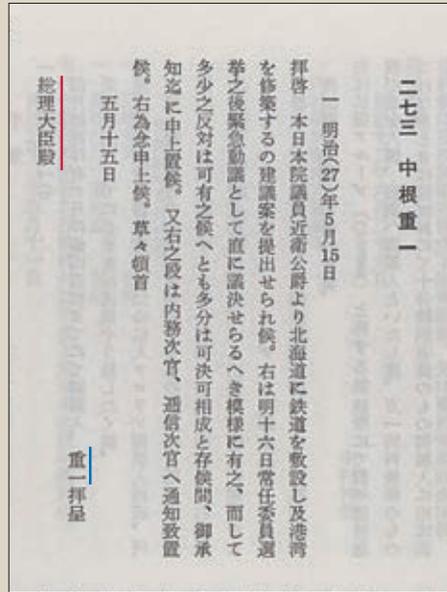
伊藤宛書簡の一例

(上) 中根重一書簡 伊藤博文宛 <伊藤博文関係文書(その1) 書簡の部 207-1> 憲政資料室所蔵

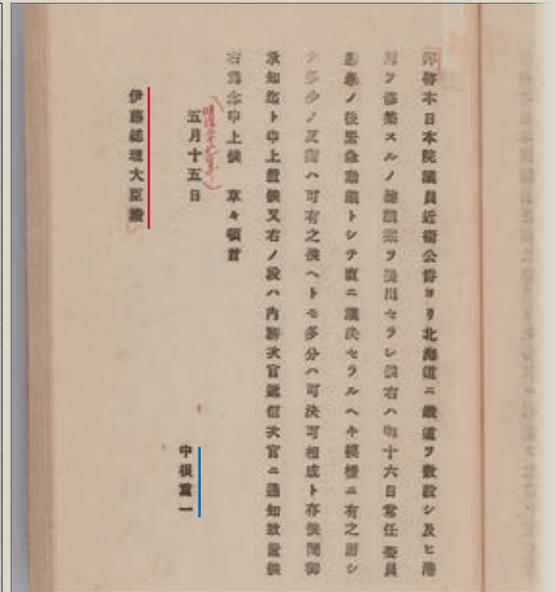
(下右) 『伊藤家文書』第91冊 p.35 中根重一書簡 伊藤博文宛 <憲政史編纂会収集文書624> 憲政資料室所蔵

(下左) 『伊藤博文関係文書』第6巻, 塙書房, 1978 p.295 <GB415-21>

手紙を発信した中根重一(1851~1906)は、医師・官僚であり、手紙をしたためた時期は貴族院書記官長。貴族院での北海道の鉄道敷設・港湾修築の建議案の可決の見通しを伊藤博文首相に伝えたもの。同一原本を参照したと推測されるが、宛先や発信者の表記を見比べると、タイプ版と塙書房版では、微妙に異なる。



▲ 『伊藤博文関係文書』 塙書房版



▲ 『伊藤家文書』(戦前、平塚篤編)タイプ版

話ですから。

今は大和町という町はなくなつたでしょう。光市になつたのですかね、あそこにある資料を、若干井上馨宛の手紙なんかもあつたかなあ、ごく少数ですが、メモしてきてどこかにしまつてあるんだけど、今日来るんで探したんだけど、どこにしまつちやつたか。

『伊藤博文関係文書』第1巻刊行まで

それはともかくとして、最初は6人ですよね。この6人で研究会を作つて。第1巻の編集にあつてようと、できるだけ原文書にあつて、「原本の書簡が」

憲政資料室にないものは印をつけて。「憲政資料室の原本である」「伊藤博文書」にあるが「平塚篤編」「伊藤家文書」に収録されていないものにも印を。年代推定をしてないから、できるだけ内容に関して年代推定をして、それを人別に分けて年代順に配列した。そうするとぐつと使いやすくなるだろうということであつたという作業をいたしました。

とにかくかなり時間はかかりましたですけどね、1960年代のごころからそういう作業を始めて、第1巻が出たのは73年ですからね。随分時間がかつたなと思ひましたけれど

も、ちよつと自慢話的に言えば、「伊藤家文書」は非常に使いづらかつたのが、「伊藤博文関係文書」(塙書房, 1973~1981)を出すことで随分使いやすくなつたと思つております。

出版社として引き受けるところがな、いんじゃないかと心配しましたけれども、塙書房で幸い引き受けてくれました。この交渉は、伊藤隆さんがね。彼はそういう点で顔が広いし、話も上手だから、うまく持ちかけて、塙書房で引き受けてくれることになりました。

第1巻が出たのは1973年ですが、全部で第9巻までありますが、私も大部分に参画したけれども、オーストラリアの国立大学に招かれて、どの巻だつたか調べればわかりますけれども、私が関与しなかつた巻「第4巻」もありましたが、殆どの巻には私が関与したということですね。

憲政資料室の移転

それで先ほど言つたように、そのうちに、こちらのほうに新しい館ができて、憲政資料室も移つたわけですね「憲政資料室は国会議事堂の4階から、昭和36(1961)年に現在の場所に移転」。いつだつたか覚えていないけれども国

会議事堂の中にあつたものに比べると、ここは使いやすくなったことには間違えありません。

で、大久保「利謙」先生はいつまでいたのかな、大久保先生と、その後、桑原「伸介」さん「職員」という方がいらっしやいましたね、それから、有泉「貞夫」さん「職員」、『星亨』「朝日新聞社、1983」を書いた有泉さん、それから広瀬「順皓」さん「職員」——わりに新しい方、もうあまり新しい方ではないけれど——がいました。伊藤隆さんも一時期ここに来ていたことが非常勤であつたのではないですかね、私はつきりした記憶がないけれども。

研究者の卵に働きかける

最初は6人で始まったんだけど、6人だけで何千通かの書簡を全部そういうことをするのは手が余るといふことで、若い人に是非やってもらおうといふことで、若い研究者の卵に働きかけて、色々な人に加わっていたんだけど、第9巻は10数人で、いま大塚有名人になっちゃったけど、御厨「貫」さんとか、北岡伸一さんとかああいう方に入っていたんだ。

伊藤が書いた手紙も読む

それで、伊藤宛の来簡のほうは整理し終わって9冊の本になりました。まとめた。その後実は、伊藤博文自身の「書いた」手紙についてもやりたいと思は思ひまして、これは色んな文書の中に入っているわけだから、山県「有朋関係文書」、桂「太郎関係文書」の中なんかに入っていたりするわけですよ。だから『伊藤博文関係文書』をやるように簡単にはいかない。

でもそういうところから集めて、コピーしてもっと若い学生たちと一緒に中央大学で読んだことはございます。私もその頃は東大を定年になって中央大学に行っていたのですけれども、中央大学でも大学院の演習でそういうものを使った。憲政資料室の中の諸家の文書に入っている伊藤発信の手紙の原文を教材として使わせてもらいました。

通説を覆す新たな発見

私自身も伊藤博文自身の書簡類を整理しているうちになかなか新しいことを発見した。それから、今までの通説でおかしいな、ということ随分発見しました。

一つだけ例を挙げておくと、ちょっと

と自慢話になるけれども伊藤博文の憲法調査——俗に憲法調査というけれど憲法調査という狭い意味になるので憲政史調査といったほうがいいかもしれないけれど——明治15(1882)~16(1883)年「のもの」で、これでヨーロッパに行きましたね。伊藤博文はなかなか筆まめな人で、日本にたくさんの手紙を送っているわけです。

確か私はこの『日本立憲政治の形成と変質』「吉川弘文館」の中で、2005年に出た本で10年ちょっと前の本で、私が東大や他の大学で教えた人たちとの本ですけども、伊藤博文がヨーロッパに行つて憲法調査、立憲制調査をして、58通というか、残っているもの「ヨーロッパでの憲政史調査中の伊藤博文書簡」は全部読む、できるだけ原本を読む、原本には残っていないけれど活字本として残っているものもあります、そういうものも含めてできるだけ読んで、少しきちんとした憲政調査時代のものを読もうということとで始めた仕事になりますけれどもね、始めてみると、明らかに今までの通説が間違っていることがいくつもありましたね。

よく言われることには、伊藤博文

はビスマルク「Otto von Bismarck 1815~1898」の心酔者であつたという説がある。手紙を読んでみると、そんなことはないんですよ。



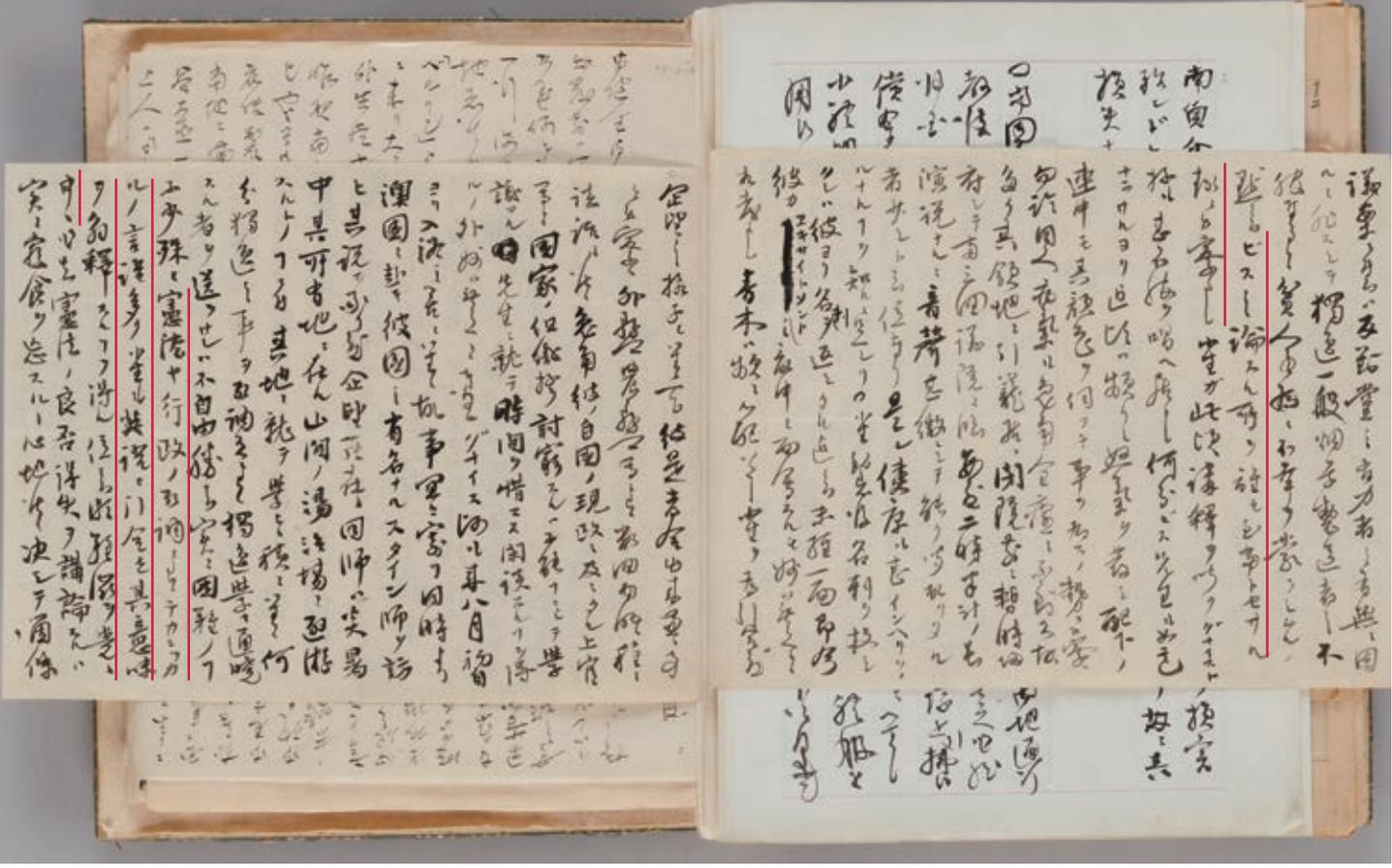
鳥海靖「伊藤博文の立憲政治調査」が収録された鳥海靖・三谷博・西川誠・矢野信幸編『日本立憲政治の形成と変質』吉川弘文館、2005 <GB415-H37>

伊藤が本音を書くのは井上馨宛の手紙

手紙も相手先、誰に出すかによって少しずつ微妙に違う。一番本音を書いている手紙はやっぱり井上馨宛の手紙ですね。伊藤博文の井上馨宛の手紙は自分の心情というか——一番親しかったからでしょうね——本音を書く。あと、長州出身の人間でも山県有朋とか、明治政府のトップに立つような三条実美とかへの手紙というのはかなり形式的でなかなか本音は書かない。ところが井上馨宛の手紙では本音を吐露するんですね。立憲政治の調査は難しい、難しいけれどもどうしようと。伊藤博文は、ドイツ語はできなかったから。英語はとても達者だけれどね。

ビスマルクの評価をめぐって

井上宛の手紙を系統的に読んでいく



伊藤博文書簡 井上馨宛 明治 15(1882) 年 7 月 5 日付 <井上馨関係文書628-9> 憲政資料室所蔵

欧州での憲政史調査のた中で、伊藤から井上馨に対して送られた書簡。ビスマルクの宿願であった煙草専売法案の動向に触れ、ビス [ビスマルク] の論ずるところを誰も至当としない、と伝えている。後段では憲法や行政の取調べには「テクニツカル」(テクニカル) のことばが多く、英語の用語に置き換えつつ、調査に難渋していることを吐露している。

と、ビスマルクのことは非常に悪口書いているんです。ビスマルクのやり方なんてとてもあれじゃだめだというような意味のことを書いていますよね。

本題から離れますが、あの当時はドイツ帝国が成立したのが1871年かな、伊藤が向こうに行ったのが82年からは3年ですからね。ドイツ帝国というのは25ぐらいの国が集まって作った連邦国家だけれども。だけど、それまでの通説というのは、伊藤博文はビスマルク心酔者で、伊藤はビスマルクに会って、手厚い指導を受けて、プロイセン憲法を学んで、日本でもドイツ流の憲法を作り上げたというものだった。

ところが、まず会ってない。ビスマルクに会ってないんですよね。帰るときに挨拶に行っただけで。伊藤博文の伝記、一番信用ができる伝記の中にも、まず最初にビスマルクと会って手厚い指導を受けた、と書いてあるけれども、井上馨宛の手紙を見るとよく分かる、「今こんな時にビスマルクと会ってもしようがない」ということが書いてあるんですよ。さすがに帰るときには挨拶に行っただけですけれどね。

ビスマルクには日本語に訳された膨大な伝記があるのですけれど、ビスマ

ルクの立場からすれば、日本から憲法調査に行ったなんてことは 歯牙にもかけていなかったでしょうね。

なぜ伝記は間違ったのか？

なぜ「伝記(『伊藤博文伝』)は」間違ったのか? ビスマルクの息子には会っているのですよね。息子はドイツ帝国の役人をやって、外国人を接待する役所にいたんだけど、何ビスマルクといったか忘れたけれども、とにかくビスマルクの息子「ヘルベルト」には会っているからだと思う。あの当時、息子とビスマルクは大ゲンカしてたんですよ。だから伊藤が行ったことが親父さんのビスマルクに伝わっていたのかわからない。

なんで大ゲンカしたのか? それは本題とは全然関係ないけれど、結婚問題でしょう。ビスマルクの息子は離婚したばかりの女性と恋仲になって、結婚しようとして、ビスマルクは猛反対して、じゃなかったかな。



明治 15 (1882) 年頃の伊藤博文 春畝公追頌会編『伊藤博文伝』中巻、春畝公追頌会、1944 (第 3 版、初版 1940)
<https://dl.ndl.go.jp/pid/3437725/1/8>

この聞き取りで言及のあった人物(1)―日本人研究者―

有泉 貞夫	1932～2022	元国立国会図書館職員 東京商船大学名誉教授 日本近代史
伊藤 隆	1932～	東京大学名誉教授 元国立国会図書館客員調査員 日本近代史
伊藤 之雄	1952～	京都大学名誉教授 日本近代史
稲田 正次	1902～1984	東京教育大学名誉教授 憲法学
大久保 利謙	1900～1995	元国立国会図書館職員 (のち客員調査員)
岡 義武	1902～1990	元名古屋大学教授 元立教大学教授 日本近代史
北岡 伸一	1948～	東京大学名誉教授 政治学
桑原 伸介	1918～2002	元国立国会図書館職員 『津田真道全集』編纂者
酒田 正敏	1937～1996	元明治学院大学教授 日本政治史
佐藤 誠三郎	1932～1999	東京大学名誉教授 政治学
清水 伸	1906～1987	元時事新報政治部長 元東洋経済新報論説委員 憲法学
高村 直助	1936～	東京大学名誉教授 経済史
瀧井 一博	1967～	国際日本文化研究センター教授 国制史、比較法史
遠山 茂樹	1914～2011	横浜市立大学名誉教授 日本近代史
芳賀 徹	1931～2020	東京大学名誉教授 比較文学
坂野 潤治	1937～2020	東京大学名誉教授 日本政治史
平川 祐弘	1931～	東京大学名誉教授 比較文学
広瀬 順皓	1944～2023	元国立国会図書館職員 駿河台大学名誉教授 日本近現代史
藤井 貞文	1906～1994	元国立国会図書館職員 國學院大學名誉教授 日本思想史
升味 準之輔	1926～2010	東京都立大学名誉教授 日本政治史
黛 弘道	1930～2010	学習院大学名誉教授 日本古代史
御厨 貴	1951～	東京大学名誉教授 旧・東京都立大学名誉教授 政治学
山口 利昭		東京大学大学院法学政治学研究科 (第1巻刊行当時) 『伊藤博文関係文書』第1巻編纂者
渡辺 昭夫	1932～	東京大学名誉教授 国際政治学

つまらない話ですけど、ヨーロッパは——キリスト教の国というのは——離婚は大変でしょう。今はどうか知りませんが。昔むかしの話だけれどヘンリー八世は、離婚するためにローマ法王と縁を切ったくらいですからね。わりに最近エリザベス女王がローマ法王と会見して400年ぶりに和解したなんて言っているくらいだから。そんな話はどうでもいいんだけど、とにかく息子のビスマルクとは会った。それをビスマルクという名前を勘違いして、ドイツ帝国宰相のビスマルクと会って指導を受けたということに

——誰がそういう判断で書いたのかわからないけれども伝記にはそう書いてある——これは単純な間違え。

「伊藤博文の憲法調査は研究しつづけたから改めて研究する必要はない」と書く日本の学者が書いている本がたたくさんあるけれども、それは明らかにおかしい。分からないことはたたくさんある。それ「日本立憲政治の形成と変質」所収論文」では井上馨宛の「伊藤の」書簡を全文引用してそれは間違えだって書いてありますけれどもね。

伊藤の手紙はフルに使われていない

いずれにしても伊藤の手紙はまだまだフルに使われていない、憲政調査についても分からないことはたたくさんある。まあ、そういうことです。だから、この資料「伊藤関係の資料」もまだまだこれから色々使いがあるのではないかということ。

幸いなことに9巻まで『伊藤博文関係文書』の方は出ましたから、伊藤への来簡については、そういう形で整理された。伊藤博文が発信した手紙についてはまだまだやらなければいけないことがたくさんあるのですけどね。全部読むなんてことが不可能だろうか、残念ながら途中まで。個人的に

は使わせていただいたけれども、まだ本格的にはやっていない。

伊藤博文研究の新しい潮流

伊藤博文研究も最近では随分新しい方の研究がどんどん進んで、瀧井さんの研究がどんどん進んで、瀧井さん、か、京都の伊藤之雄さんの研究があつて、伊藤博文のイメージも随分変わつたんじゃないか、という風に、私が学生時代の頃に比べては、確かにそういう風に思います。それとともに、明治専制政府、絶対主義的専制政府というイメージで明治政府を捉えてたのも今じゃまあ始まらないでしょう。そういう見方をする人は殆どいなくなつたでしょう。

印象深い研究書

伊藤博文の研究で、1960年代から1970年代初めにかけて、ハワイ大学のジョージアキタさんが『明治立憲制と伊藤博文』(東京大学出版会、1971年)という本を出されて、あれはかなり明治政府の絶対主義的専制政府というイメージが変わる業績だったと思います。「明治立憲制は外見的通説だったから。それに挑戦したのが

この聞き取りで言及のあった人物(2)ー外国人研究者ー

George Akita	ジョージ アキタ
1926~	ハワイ大学マノア校名誉教授 歴史学
Ronald P. Dore	ロナルド P. ドーア
1925~2018	ロンドン大学名誉教授 社会学
Carol N. Gluck	キャロル N. グラック
1941~	コロンビア大学教授 歴史学
John W. Hall	ジョン W. ホール
1916~1997	元イエール大学教授 歴史学
Marius B. Jansen	マリウス B. ジャンセン
1922~2000	プリンストン大学名誉教授 歴史学
Edwin O. Reischauer	エドウィン O. ライシャワー
1910~1990	元駐日米国大使 元ハーバード大学教授 歴史学

ジョージアキタさんの『明治立憲制と伊藤博文』、あの本でしょう。「明治」政府首脳が国際的視野に富んで、開明的性格だったことを積極的に評価しておられる。私は読んだときは、70年代前半に読んだけれども、私としては「これは我が意を得たり」という感じでしたですね。

あの頃やはり日本人で本を出したのは、升味準之輔^{ますみじゅんのすけ}さん。亡くなりましたけれど、『日本政党史論』[全7巻、1965~1980]という本を東京大学出版会から60年代後半位から出されて、ずっとこれも大正から昭和まで

書いて、あそこの中には人物評伝が盛んに出てくるのです。これは私はとても面白く読んで伊藤博文についても今までのイメージと随分変わった業績が出てきたなという風に感じております。

それから、外国人の業績を——ジョージアキタさんも外国人といえれば外国人だけれども——もう少しきちんと整理する必要があると思う。私個人的には60年代(だったかな)に国際学会に出ましたね、外国人の研究は日本人の自国の研究よりも積極的に高い評価をしているということを感じましたですね。

日本の近代化論 日米の研究者の交流

1960年代に箱根会議⁽¹⁰⁾というのがあります、外国人の学者と日本の学者が日本の近代化をテーマにした学会があって、議論があったんですね。

一番の長老はライシャワー博士。ライシャワー博士以下、ジョンホール、「ロナルド」ドーア、坂本龍馬のことを研究していた「マリウス」ジャンセンなどが出席して、欧米の日本研究者たちが日本の近代化をテーマにした議論を。我々の研究会でもこういうことをして、もう亡くなられましたけれど

も、佐藤「誠三郎」^(せいさぶろう)さんは私より2年位先輩なんですよね、その人が情報を伝えてくれて。

我々の研究グループは大体欧米の研究者の見方のほうが正確、確かなんじゃないかという感じでした。日本の研究の中では異端視されたわけで、左翼の人たち、マルクス主義的な近代史研究者の中では、ケネディ・ライシャワー路線に乗っかるなということに盛んに言われましたが、私はそういう考えには同調できない。欧米の一つの国を研究しているだけではなく、比較研究ですからね。近代化の過程を中国と日本を比較するなどして、私もアメリカの学者の研究を取り上げて、書評⁽¹¹⁾を書いたこともあります。

比較文化の視点から日本の近代を見る

私は駒場にいた頃で、比較文化の人たち⁽¹²⁾とよく話をしました。あの人たちは比較文化という視点から日本の近代を眺めている人たちが多かったもので、芳賀徹さんとか平川祐弘^(すけひろ)さんとか、そういう人たち。私よりちょっと年上の人たち。確か芳賀徹さんは、岩倉使節団をやっていたから⁽¹³⁾——伊藤のこともやっていたけれど——異文化との接触、異文化交流という見方が私としては面

白かつたんですね。アメリカの学者ではキャロルグラックという人がいましたけれども、一度東大に来て研究会をやった。キャロルグラックは日本語が非常に達者で日本語で議論してくれるからそれは非常にありがたかった。感心したり、ちょっとおかしなところだったり、色々ありましたが。

ということ、非常に雑駁^(ざつぱく)な話で恐縮ですけど、私の話はこれくらいで終わりにさせてください。私も大分記憶力が薄れてしまっているから、何をどうやってやったかということはありません。覚えていないのですが。私の話はここまでで、ご質問がありましたら、自由に。「次頁の質疑応答に続く」

当館刊行物における伊藤博文関連記事 (一部)

- * 瀧井一博 「『伊藤博文関係文書』のデジタル化に寄せて『伊藤博文秘録』講読のころ」『国立国会図書館月報』696, 2019.4, pp. 5-9 https://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_11253758_po_geppo1904.pdf?contentNo=1#page=7
 - * 「憲政資料室から 伊藤博文関係文書の世界」『国立国会図書館月報』696, 2019.4, pp.10-15 https://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_11253758_po_geppo1904.pdf?contentNo=1#page=12
 - * 井上馨関係文書購読会 「『井上馨関係文書』所収伊藤博文書翰翻刻明治一五年三月から明治二六年四月まで」『参考書誌研究』56, 2002.3 pp.1-32 <https://dl.ndl.go.jp/pid/3051474>; 同 「『井上馨関係文書』所収 伊藤博文書翰翻刻(続)」『参考書誌研究』68, 2008.3 pp.1-60 <https://dl.ndl.go.jp/pid/3051588>
- 両記事の書簡の翻刻を行った「井上馨関係文書購読会」は鳥海靖氏(当館客員調査員)が講師を務めた平成9年度の「図書館情報学専門研修」を受講した当館職員によって結成され、その後、沼田哲氏(鳥海氏の後任の客員調査員)にも指導を受けた。

質 疑 応 答



当館の閲覧室 昭和23(1948)年から昭和36(1961)年まで国立国会図書館は旧赤坂離宮の建物に置かれた。

『写真公報』3(20), 1956.10 <Z23-37>

国立国会図書館の使い勝手

昭和36(1961)年に新庁舎ができる前、国会議事堂の中にあつた憲政資料室や、支部上野図書館⁽¹⁴⁾、赤坂離宮⁽¹⁵⁾に置かれた当館の使い勝手はいかがでしたか？

「議事堂にあつた頃の憲政資料室の」
閲覧室は居心地がよかったですね。

上野図書館は、ひどいものでしたからね。裸電球で冬でも暖房もきかないし。あつたことはあつただけだけれど、かないんですよ。閲覧も目録にあるからと、30分位待たされた挙句「これはありません」とかね。がっかりしたことがあつて。

雑誌類は今の赤坂離宮「迎賓館」で、あれはまた立派で、こんなところで入つていいのかと思うような赤じゅうたんがずっと階段に敷かれていて、大学院生だったところで、入り辛かつたね。あんまり立派すぎて。

東京大学教養学部 海軍文庫

「伊藤家文書」の他にどういう資料がありましたか？

軍事関係のものは海軍文庫だから随分ありましたよ。それからスクラップブックがたくさんあつたんだな。軍縮に関するものとか。旧一高の図書館

に、海軍経理学校が移管したんでしょね。大体は活字の文献ですよ。

伊藤博文の文書について

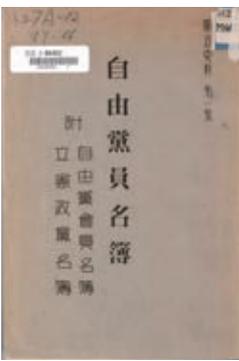
刊行された『秘書類纂』やその原本との関係をどう見たら良いのでしょうか？

戦前に出版された『秘書類纂』の作成は戦争中でもあり原本によつてできたものかわからない。『秘書類纂』は重要。あれもかなり、私もきちんと調べたわけじゃないけど、ずさんなところがあつたようです。読んでて意味が通らないところありますからね。膨大なものだから全部読んでないけれど、あれも非常に整理しにくいものでしょ。それはやっぱり、原本がはっきりしていて、原本のあるものが一番貴重なものだと思うけど、『秘書類纂』は相当ずさんな編集の仕方をしているんじゃないか、もちろんはるか前のことだからどうやって編集されたか知りませんが。明治30年位で終わつてしまつている。それ以降のものって殆どないのでは。多様な人物の旧蔵文書から伊藤宛書簡を収録している『伊藤博文関係文書』第9巻(増書房)では、収録すべき書簡をどうやって探したのですか？

色んなところから出てくることがあるんですよ。それは諸家文書に混ざっていますよね。たまたまですね。「9巻に収録された書簡の持ち主である」斎藤房雄さん「先祖のゆかりから伊藤宛の書簡を持っていた長野県上田市の別所温泉の別荘の主人」というのは伊藤藤隆さんが見つけてきたのかな。⁽¹⁶⁾ 古本屋なんかで軸物とか出ることもあるでしょ。憲政資料室でも、軸物なんかで買つたり、ありますよね。「伊藤「博文関係」文書(その2)」も後で買いましたね。伊藤博文宛のものを諸家の文書の中からあれば見つけています。その時までに調べて分からないものももちろんあつたけれど。

国立国会図書館で使われていない伊藤の資料はありますか？

使われていないものがたくさんあるでしょう。そりゃあもう。京都の方なんかは来ている方いらつしやるのかな。最近、随分伊藤博文の研究が盛んになってきたから。僕ら学生の頃は研究盛んじゃなかったですよ。古本屋行くと伊藤博文伝なども1950年代の終わりなんかは10000円しなかった。3冊本でね。物価は違うけど。



(右)『明治史料通信』第1号,1955 <Z72-V672>
 (左)『明治史料』第1集,1955 <https://dl.ndl.go.jp/pid/3014088/1/4>

明治史料研究連絡会は昭和30(1955)年の歴史学研究会大会を契機に同年設立。資料情報の共有や資料集の編纂を担ったが、昭和37(1962)年解散。『明治史料通信』1-25号、『明治史料』1-11号、『明治史料研究叢書』(論文集のシリーズ)等を残した。『明治史料通信』第1号によると、創設当時の会の代表者は稲田正次(東京教育大学教授)。委員会を援助するメンバー16名のうちには遠山茂樹(のち横浜市立大学教授)や大久保利謙(名古屋大学教授)の名もみえる。

伊藤博文の研究動向

伊藤博文の研究は低調でしたか？

あの当時はね。盛んになりだしたのは70年代位かな。塙書房から『伊藤博文関係文書』が出たこともあるでしょうし、明治政府の評価が変わってきたでしょ。明治の立憲政治の評価が変わってきた。かつてのような絶対主義専制政府だなんていうのは殆ど言わなくなった。憲法調査「の研究」は研究しつくされたので研究する必要はないなどというのは、かなり古い方がたの中にはそのような読んだことがありますよ。稲田「正次」さんとか清水「伸」さんがやったから、もうこれ以上の上のことは研究する必要はないという雰囲気はあったのね。僕らが大学院生

のときくらいまでは。

だけど、とんでもない。まだまだ分からないことたくさんあるじゃないか。大体随員はどうしてああいう人たちを連れて行ったのか。ドイツ語できない人たくさんいるんですよ。最初からドイツを指すなら、もっとドイツ学者をもっと入れなくてはいい。ドイツ語ができる人が随員のうち2人くらいじゃないかな。河島醇「外交官、1882-1883年の伊藤の憲政史調査に同行」はできるけど。公使で「ドイツに」行ってた青木周蔵「外交官」は奥さんがドイツ人だからドイツ語達者だけど。ドイツを最初から目指して行ったというのは、ちょっと僕は疑問に思っている。それだったらもともと日本にだってドイツ学者たくさんいたんだから。加藤弘之「政治学者、蕃書調所でドイツ語を学びのち帝国学士院長」なんかだって、連れて行かれないわけだから。

山県有朋への評価

伊藤と比べ山県への評価はどうでしたか？

山県は、議会政治への関心は薄い人だから、伊藤はとにかく立憲政友会を作って政党政治の基礎を築いたという

ことで、伊藤の方が評価が高かったでしょう。あの当時軍人の大御所というイメージが強かった。最近山県の資料をだしますよね。あの出すあたりから変わりつつあるでしょうね。岡義武先生「日本政治史の研究者」も岩波新書で出しているし。岡さんはゼミでとったけど、山県の話は、好きではないけれど研究する価値がある、なんかそういう言い方されていたな。別に好きなわけじゃないですけども、なあって。山県は椿山荘とか庭園趣味もあつたし。見る人によつては面白いんだね。成金趣味というか。伊藤はせいぜい二千坪だけど、椿山荘は一万数千坪あって、山県のほうがお屋敷についての趣味はあつたし、一流の庭師も盛んに使つてやってたからにはるかに造詣深かつたんだらうし。

研究会の思い出

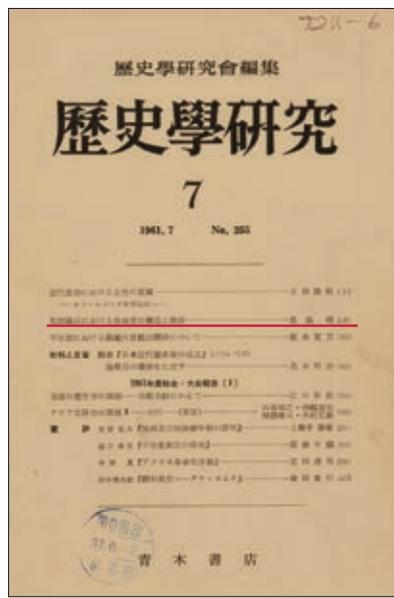
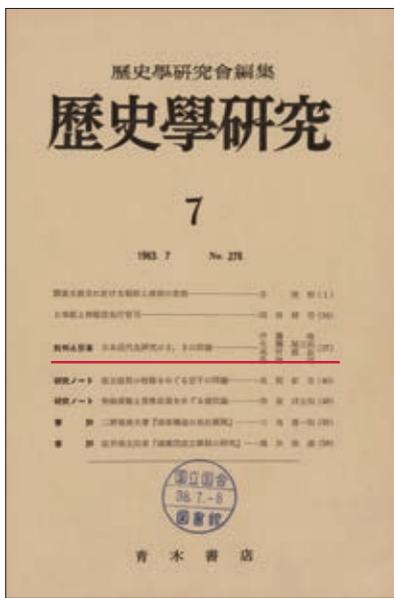
明治史料研究連絡会はどうな会でしたか？

あれは、明治を研究した人で、大学の紀要なんかで、手に入らなくなったようなものを集めて出したのかな。

そういうえば、私大同団結運動の卒論を書いて、その後、初期議会の自由党についての修士論文を歴史学研究会の

近代史部会で報告しろと言われて報告したんですよ。最長老の遠山茂樹先生が40代半ば位でしょ、もう少し若くて私が20代後半になっていたかな。あとは30前後の若い研究者。色々報告したら、みんなからさんざん批判されて、『歴史学研究』に載せるとかどうかという審査会も兼ねるといふことで、私も張り切つて報告したんだけど、要するに「お前の研究は階級的視点に欠けている」「基本矛盾が何か明確ではない」「階級矛盾が何かを明らかにしない」「歴史の論文はだめだ」などとさんざんやられたんだけど、遠山先生は、最後に一言「君の研究は面白いから載せましょ」と言ってくれた。そういう恩義があるから、論文を書くとき送つたけれども、遠山先生は、「これは私の考えとは違うけれどよく勉強している」と批評をくださった。遠山先生は違うものを認める寛容さがあつた。

1960年の春に修士課程終わって、修士論文を載せてもらったのが初期議会の自由党を扱った論文でしたかね。その後、私と伊藤隆さんと高村直助さんとかで、4人の連名で近現代史研究に対する批判という意味のタイトルをつけてもらつて、載せてもらったのだけれど、私は全然知らなかったけれど



ども、伊藤隆さんが大変苦勞したよう
で、こんなものはだめだというのを載
せてもらった、苦勞したようですよ、
交渉。歴研「歴史学研究会」の委員の
方々と激論をした。後から大分苦情が
出た。歴研の主流派の方から「お前た
ち4人があんなものを書くとは」とさ
んざん怒られて。でも批判的な視点か
ら取り上げるのが前提なので、批判し
なかつたら意味ないですからね。

(右) 鳥海靖「初期議会における自由党の構造と機能」『歴史学研究』255, 1961.7, pp.16-29 <Z8-282>

(左) 伊藤隆・佐藤誠三郎・高村直助・鳥海靖「日本近代史研究の2,3の問題 岩波講座「日本歴史」近代(1~4)によせて」『歴史学研究』278, 1963.7, pp.27-39 <Z8-282>

1 この聞き取り中で言及のある伊藤博文の関係文書のうち、憲政資料室で所蔵しているまとまった文書は次の通り。

①「伊藤博文関係文書(その1)」は総計6,023点。大部分は昭和25(1950)年に伊藤家より譲渡。書簡約5,500通(主に伊藤博文宛)及び書類約1,000点(立憲政体の樹立に関する資料や外交関係資料等)からなる。戦前から伝記や資料集の編纂に用いられた。

詳細はリサーチ・ナビ「伊藤博文関係文書(その1)」のページを参照。
<https://rnavi.ndl.go.jp/kensei/jp/itouhirobumi1.html>

②「伊藤博文関係文書(その2)」は総計133点。平成10(1998)年に古美術商より購入。書簡(主に伊藤宛)及び書類(岩倉使節団随行中の日記等)からなる。

詳細はリサーチ・ナビ「伊藤博文関係文書(その2)」のページを参照。
<https://rnavi.ndl.go.jp/kensei/jp/itouhirobumi2.html>

③タイプ版「伊藤家文書」(「憲政史編纂会収集文書」624)総計91点。「憲政史編纂会」は、大日本帝国憲法制定50年を記念して憲政史編纂のために衆議院に置かれた組織。詳細はリサーチ・ナビ「憲政史編纂会収集文書」のページを参照。

<https://rnavi.ndl.go.jp/kensei/jp/kennseishihennsannkaishuushuumonjo.html>

2 帝国議会開設を前に反政府諸派の結集による議会の多数党形成をめざした運動。

3 「三島通庸関係文書」(当館憲政資料室所蔵)は当館が昭和27(1952)年に受け入れた総計6,879点の文書。三島通庸(1835~1888, 山形・福島・栃木の県令や警視總監を歴任)旧蔵。同文書中には民権運動家について記した報告書も含まれる。

4 平塚篤(1883~1942)は記者を経て、「伊藤家文書」、『秘書類纂』、『伊藤博文秘録』、『続伊藤博文秘録』など、伊藤博文関係の文献の編纂にかかわった。

5 「秘書類纂」は大正6(1917)年に宮内省が伊藤家より受け入れた伊藤博文の旧蔵資料。現在、宮内庁書陵部・伊藤家蔵。戦前に刊行されたものとしては翻刻版の『秘書類纂』全24巻(秘書類纂刊行会, 1933-1936)がある。憲法分野の翻刻は『憲法資料』上中下巻(憲法資料刊行会, 1934)として別に刊行。近年の影印版として檜山幸夫 総編集, 伊藤博文文書研究会 監修『伊藤博文文書』全127巻(ゆまに書房, 2007-2015)。

6 伊藤隆氏(東京大学名誉教授)は平成2(1990)年4月~平成7(1995)年3月に当館客員調査員。

7 鳥海靖「伊藤博文の立憲政治調査」(鳥海靖・三谷博・西川誠・矢野信幸編『日本立憲政治の形成と変質』吉川弘文館, 2005)pp.128-129では、伊藤と宰相ビスマルクとの面会は、伊藤のドイツでの調査がほぼ終わりベルリンを離れる直前の明治16(1883)年1月30日であったことが示されている。

8 伊藤に関する著書として、瀧井一博『伊藤博文 知の政治家』中央公論新社, 2010 <GK65-J25>;同『明治国家をつくった人びと』講談社, 2013 <GB421-L19>

9 伊藤に関する著書として、伊藤之雄『伊藤博文 近代日本を創った男』講談社, 2009 <GK65-J17>

10 マリウス B. ジャンセンが、ジョン W. ホールら日本研究者とともに設立した近代日本研究会(Conference on Modern Japan)が、昭和35(1960)年の夏(8月30日~9月1日)に箱根で開いた会議。日米の研究者間で日本の「近代化」についての議論を活発化させる契機となった。

11 鳥海靖「スカラピーノ著 日本——伝統主義と民主主義の中間」『東洋学報』43(3), 1960.12, pp.103-106 <Z8-406>

12 東京大学に設置された比較文化研究室(昭和28(1953)年に発足)の所属教員を指すものと思われる。

13 岩倉使節団に関する芳賀の編著書として、芳賀徹編『岩倉使節団の比較文化史的研究』思文閣出版, 2003 <A99-Z-H69>

14 国立国会図書館支部上野図書館を指す。上野公園にあった(帝国図書館改め)「国立図書館」は、「国立国会図書館法」(昭和23年法律第5号)の制定に伴う政令「国立図書館官制を廃止する等の政令」(昭和24年3月31日政令第58号)により、昭和24(1949)年以降、国立国会図書館支部上野図書館となった(4月1日発足)。

15 国立国会図書館は、昭和23(1948)年の開館から昭和36(1961)年まで、赤坂離宮(現・迎賓館)の場所に置かれた。昭和36(1961)年に永田町の新庁舎(現・東京本館[本館])に移転。

16 当該書簡の発見経緯について伊藤隆『日本近代史 研究と教育』伊藤隆, 1993, p.235 <GB411-H153>

17 両氏の代表的な憲法史研究として稲田正次『明治憲法成立史』有斐閣, 上巻(1960), 下巻(1962)<323.3-1367m>;清水伸『独塊に於ける伊藤博文の憲法取調と日本憲法』岩波書店, 1939

<https://dl.ndl.go.jp/pid/1278418>

18 山県宛書簡を集成した資料集として尚友倶楽部山縣有朋関係文書編纂委員会編『山縣有朋関係文書』山川出版社, 第1巻(2005)<GK157-H20>, 第2巻(2006)<GK157-H28>, 第3巻(2008)<GK157-J1>

19 岡義武『山縣有朋 明治日本の象徴』岩波書店, 1958 <289.1-Y2330y>;篠原一・三谷太郎 編『岡義武著作集』第5巻(山縣有朋・近衛文磨) 岩波書店, 1993 <GB411-E41>

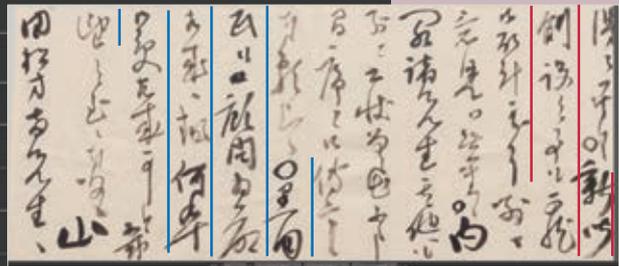
*本記事の< >内は当館請求記号

*当館憲政資料室のご案内は本誌p.18もご覧ください。

鳥海先生は「私も大変面白かった。ただこっちが忘れていたことであってあまり役に立たなかったかな」という控え目なことばで質疑を結ばれました。貴重なながらも使いにくい戦前の資料集「伊藤家文書」を“このままにしておけない”という気持ちが仲間を巻き込み、労の多い『伊藤博文関係文書』全9巻の編纂につながったとお話は、編纂の積み重ねという意味でも考えさせられるものでした。鳥海先生は、聞き取りの数年後に86才で亡くなりました。この聞き取りの内容は、ご遺族の許可を得て公開するものです。鳥海先生から役に立つお話を伺えたことに感謝しています。

(文責 本誌編集担当)

永続的識別子	info:ndljp/pid/11030981
タイトル	伊藤博文書簡〔草稿〕 井上馨宛カ
作成者	〔伊藤博文〕
宛先	〔井上馨〕
年月日	〔明治15年1月〕
数量等	数量: 1枚
内容記述	内容: 今晚の船便で長崎直行予定 竹添の報告船中で拝見のつもり 新聞創設の件然るべくお取り計らいを願う 黒田顧問拝命引受を希望 記述法: 墨書 用紙: 和紙巻紙 備考: 「山田・松方両先生へ...」の後欠
請求記号	伊藤博文関係文書 (その1) 書類の部5
所属	伊藤博文関係文書 (その1)
識別子 (DOI)	10.11501/11030981

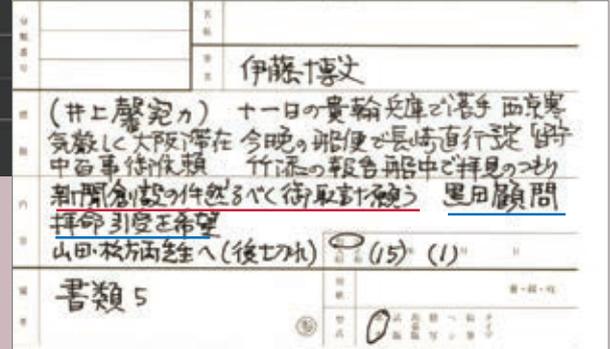


書簡の原本の画像

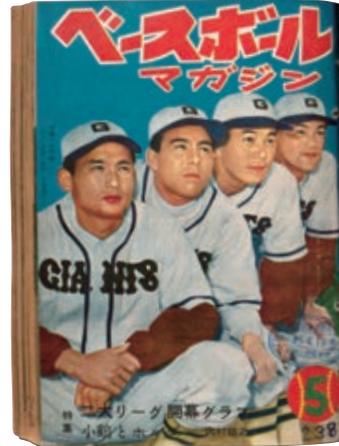
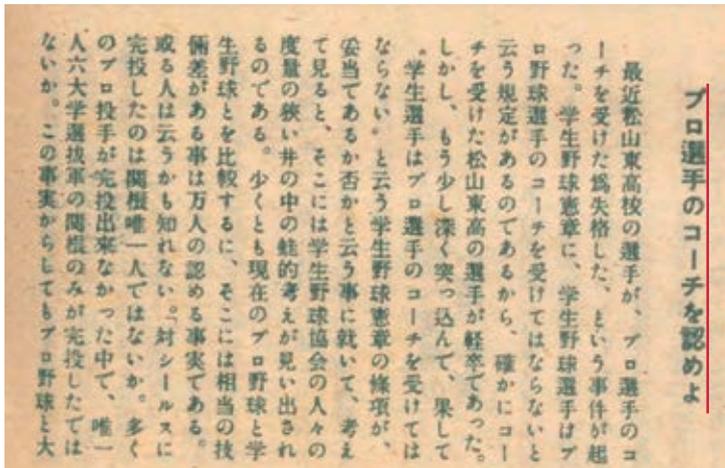
▲ 「国立国会図書館デジタルコレクション」の画面

<https://dl.ndl.go.jp/pid/11030981>

鳥海氏は平成7（1995）年から同12（2000）年にかけて、当館客員調査員として伊藤博文の旧蔵文書の読解と目録カード作成にあたりました。平成30（2018）年3月14日には当館デジタルコレクション上において「伊藤博文関係文書（その1）」書類の部全件の画像が公開されました。鳥海氏がその知見を生かしてオリジナルの書簡を読解した上で作成した目録カードは、デジタルコレクション上の書簡の年代や内容として生かされています。聞き取り当日、「びっしり書いてあるカードがあるのはなぜ？」と質問したところ、「全文とついたらほうが内容が分かるものや簡単に要約できないものはびっしり書いている」というお答えでした。なお、この聞き取りも、「伊藤博文関係文書（その1）」のデジタル化を進めるに先立って、伊藤博文の関係資料についてより深く知る目的で行われたものです。



▲ 鳥海氏が作成した目録カードの一例
「伊藤博文関係文書（その1）」（憲政資料室所蔵）の内容が記されている。くずし字で記された書簡の内容の要点をまとめ、年代推定を行っている。



©BBM

プロ選手のコーチを認めよ

最近松山東高校の選手が、プロ選手のコーチを受けた為失格した、という事件が起った。学生野球憲章に、学生野球選手はプロ野球選手のコーチを受けてはならないと云う規定があるのだから、確かにコーチを受けた松山東高校の選手が失格であつた。しかし、もう少し深く突っ込んで、果して学生選手はプロ選手のコーチを受けてはならない。と云う学生野球憲章の條項が、安当であるか否かと云う事に就いて、考えて見ると、そこには学生野球協会の人々の度量の狭い井の中の蛙の考えが見出されるのである。少くとも現在のプロ野球と学生野球とを比較すると、そこには相当の技術差がある事は万人の認める事実である。或る人は云うかも知れない。対シールズに完投したのは関根唯一人ではないか。多くのプロ投手が完投出来なかつた中で、唯一人六大学選抜軍の関根のみが完投したてはないか。この事実からしてもプロ野球と大

学野球の技術差は、大した事はない」と。しかしあの場合シールズは明らかに力を落していた。ベストメンパーではなかつた。唯一回の試合で力柄の比較をする事は危険である。六大学選抜軍がシールズに四対二で敗れ、全日本軍が十三対四で敗れても、六大学選抜軍が全日本軍より強いとは言えない。大学選手とプロ選手の技術を比較するのは、最も良い方法は大学時代群鷲中の一鶴的存在であつた選手が、プロへ入つてどれだけ働いたかという事を調べる事である。常見、芳村、上屋、杉下、小川或いは関西の櫻、片岡、等々大学時代は、いずれも一流中の一流であつた人々をさへプロ野球では二流或いは三流ではないか。さて話が大部脱線したが、とにかく私の言いたい事はプロ野球選手のコーチを認めよ、という事である。それに就いて不思議に思う事は昨年のシールズ来朝に際し、六大学選抜軍が試合をしたし、又コーチも受けている。シールズは純然たるプロ野球団である。不思議にも、その時は別にアマチュア規定云々等とは口にも出さなかつた。それなのに今度ばかりこのような問題を引き起すとはまことにおかしな話である。別に相手が外国人だから、アマチュア規則に違反せぬと云うわけでもあるまい。そして又今後再びシールズが来朝する事もあるであろうが、現在の様にプロ選手にコーチを受けられぬ様な規定では、折角の好意も無にせねばならない。要はプロ選手のコーチを認める事である。確かに、それによつて弊害が起る場合もあり得るかも知れない。しかし、それはコーチを受ける者の心掛け次第である。そして、それによる弊害よりも、より多くの利益が得られるという事を認識せねばならない。学生野球をより強く、より大きく発展させようという熱意が、少しでもあるならば、一刻も早くプロ選手のコーチを認めるよう学生野球憲章を改正すべきである。

（東京都目黒区神ノ木 六五〇 鳥海靖）

初めての著作～16才（高校在学中）の雑誌投稿～
鳥海靖「プロ選手のコーチを認めよ」『ベースボール・マガジン』,5(5), 1950.5（「読者の声」欄）
<Z11-24>

憲政資料室の新規公開資料から

国立国会図書館は、近現代の政治家、官僚、軍人らの所有していた個人文書（憲政資料約四三万点）を所蔵しています。このたび東京本館憲政資料室で新規に公開した資料をご紹介します。

憲政資料は主にご子孫などからの寄贈によって収集した資料から構成されており、整理や目録作成を経て一般に公開されていきます。この記事により、政治史をはじめ様々な分野の調査・研究を支える貴重なコレクションの魅力の一端を味わっていただければ幸いです。

（利用者サービス部 政治史料課）

憲政資料室のご案内（東京本館 本館4階）

幕末・維新时期から現代にいたる政治家・官僚・軍人などが所蔵していた文書類を集めた「憲政資料」、第二次世界大戦終了後の連合国による日本占領に関する米国の公文書を中心に集めた「日本占領関係資料」、主に北米・南米への日本人移民に関する資料を集めた「日系移民関係資料」を扱っています。

憲政資料室の利用方法、所蔵資料の概要については、国立国会図書館ホームページ「憲政資料室」(<https://www.ndl.go.jp/tokyo/constitutional/index.html>)、今回紹介する資料を含む憲政資料の概要については、リサーチ・ナビ「憲政資料（憲政資料室）」(<https://mavi.ndl.go.jp/kensei/jp/index.html>)をご覧ください。



憲政資料室

近藤廉平（1848-1921）

嘉永元（1848）年、徳島の医者の子に生まれる。慶應義塾や大学南校で学び、明治5（1872）年に三菱商会入社。明治16（1883）年には郵便汽船三菱会社横浜支店支配人となる。この時、同社の独占状態をこころよく思わない政府・財界関係者が共同運輸を設立、激しい競争となったが、両社は合併して日本郵船となり、近藤は明治28（1895）年から死去する大正10（1921）年まで社長を務める。日露戦争後は財界指導者として活動、明治43（1910）年渡清実業団団長、明治44（1911）年男爵、大正7（1918）年貴族院議員となる。

肖像写真の出典：「近代日本人の肖像」
(<https://www.ndl.go.jp/portrait/datas/566/>)



近藤廉平関係文書

（二八三点 令和五年六月公開）

日露戦争後、産業革命が進行し全国で実業家層が台頭すると、その勢力は政治的にも無視できないものとなりました。大浦兼武（おわらかねたけむら）といえ、反民権派の警察官僚というイメージが強いのですが、他方で彼は、そのような実業家層を藩閥の支持勢力とすべく政治的に組織しようと努め、大同倶楽部・中央倶楽部など「吏党」を編成していました。このような状況の中、明治四五（一九一二）年五月一五日に、任期満了による第一回衆議院議員総選挙が実施されたのですが、写真で紹介する資料は、実業家の近藤廉平に対し大浦が、吏党系候補者の選挙資金援助を依頼した書簡です。ここからは、「戦闘準備日々に切迫し甚困難を極め候」（A）と窮状の訴えに始まり、「御示の額に今一步御進め被下候は、無此上大幸」（B）と追加を求め、最後には「恰も十万の援兵を得たる

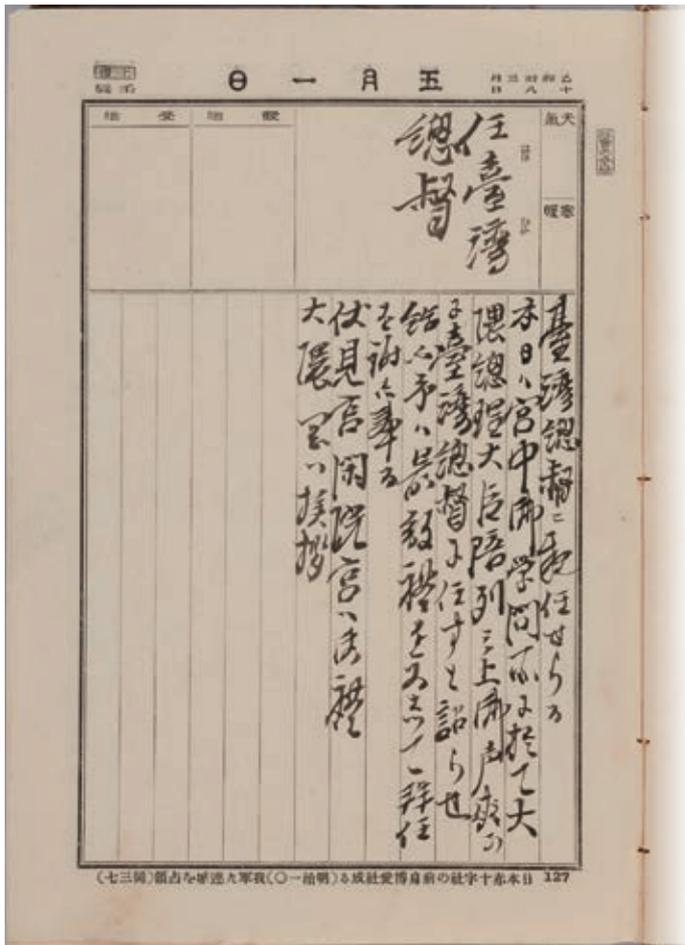


写真3 大正四年当用日記 大正4年5月1日 <安東貞美関係文書2017>



写真2 日記帳の表紙に貼られたラベル
 (左) 既所蔵分 明治三十八年当用日記
<https://dl.ndl.go.jp/pid/12848868>
 (右) 新規公開分 明治四十一年当用日記
 <安東貞美関係文書2011>

安東貞美 (1853-1932)

嘉永6(1853)年長野生まれ。明治5(1872)年に大阪陸軍兵学寮を卒業後、陸軍軍人として西南戦争、日清戦争、日露戦争に従軍し、第10師団長、第12師団長、朝鮮駐劄軍司令官等を歴任。明治40(1907)年には男爵を授かり、大正4(1915)年1月に陸軍大将。同年5月に台湾総督に就任し、大正7(1918)年まで務めた。大正12(1923)年退役、昭和7(1932)年死去。

肖像写真の典拠：『華族畫報』華族畫報社、1913
<https://dl.ndl.go.jp/pid/11579194/1/374>



安東貞美関係文書(第四次(二〇二二年)受入分)

(二点 令和四年一〇月公開)

朝鮮駐劄軍司令官、台湾総督などの要職を歴任した陸軍大将・安東貞美の日記です。明治一五(一八八二)年から明治二六(一九一三)年までのポケットサイズの日記(懐中日記)と、明治四〇(一九〇七)年から大正八(一九一九)年にかけての日記帳、あわせて二点を新たに公開しました。

憲政資料室では、平成二五(二〇一三)年以降数度にわたりご遺族から寄贈された安東の旧蔵資料を所蔵していますが、その中の日記は明治二〇年代後半から明治三〇年代後半までの範囲に限られ、今回の資料はその欠けている時期を補うものです。既に当室で所蔵していた日記と、表紙に貼付されたラベルが同種のものであることから、これらが元々同じように整理されていたことがうかがえます(写真2)。

大正四(一九一五)年の日記の内容を見てみます。五月一日、宮中で大正天皇から「御声爽かに台湾総督に任す」と告げられ、安東は「最敬礼を為して拝任を謝し奉った」と記しています(写真3)。六月一日には台北に着任し、それから連日、台湾各地の視察を行っている記述が続きます。着任からさほど経たない八月三日の未明に、日本統治下の台湾における最大規模の抗日蜂起事件とされる「西来庵事件(タバニー事件)」が島南部で発生しますが、八月三日にその旨が記され、四日に安東は守備隊に対応を命じています(写真4)。

*「憲政資料室の新規公開資料から」安東貞美関係文書(本誌第643号、2014年10月)

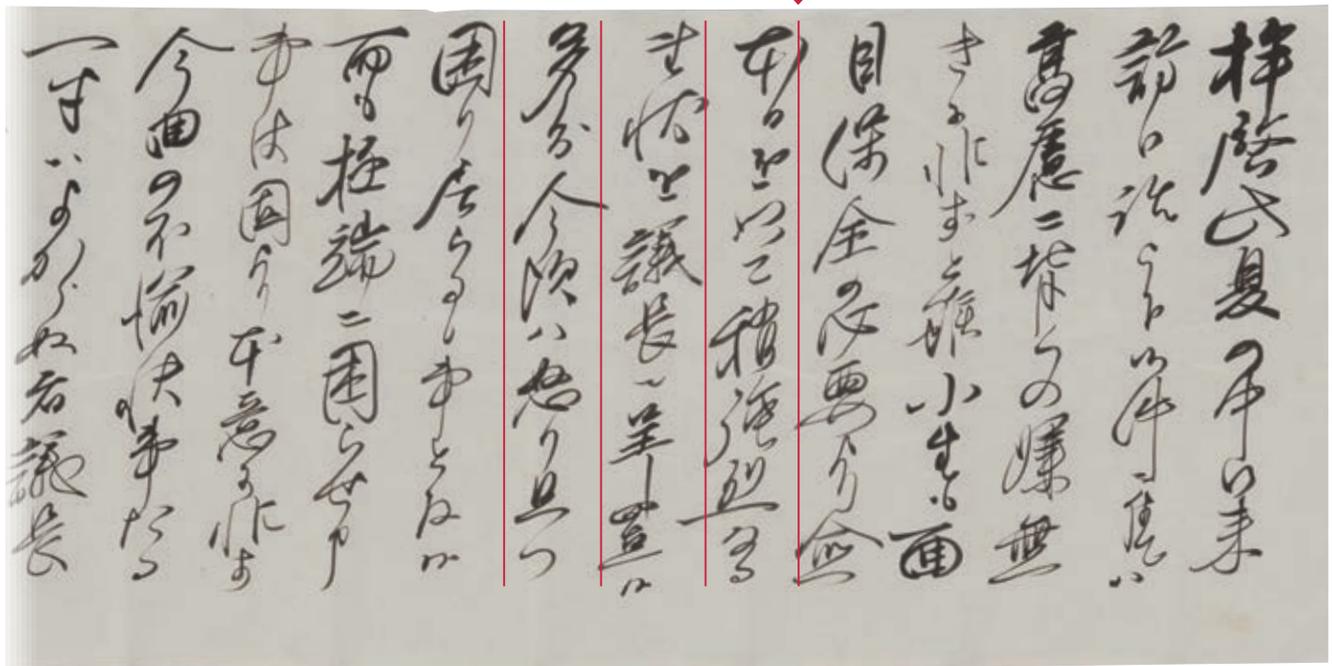
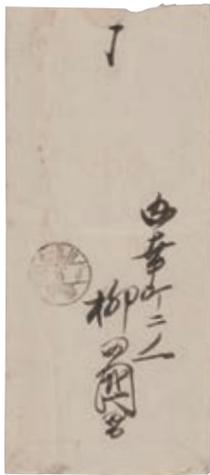


写真6 柳田国男書簡 石渡敏一宛 [大正8年] 9月30日 <石渡敏一関係文書24>
書簡の冒頭と後半、封筒。



いしわたとしかず 石渡敏一関係文書

(五〇点 令和五年二月公開)

明治期に司法官僚として次官まで登り詰め、第一次西園寺公望内閣の内閣書記官長として首相を支えた経験を持ち、後に長く貴族院議員なども務めた、石渡敏一の資料です。書簡類が中心であり、職務上の関係者から届いたものが多くを占めています。

写真6は、民俗学者として知られる柳田国男が石渡へ宛てた書簡で、大正八(一九一九)年九月三〇日付けと推定されます。柳田はもともと官僚で、農商務省勤務からスタートし、この頃には貴族院書記官長を務めていました。書記官長は、現在では議院の事務総長に当たり、議長指揮により事務を司る役職でした。しかし、柳田と当時の貴族院議長である徳川家達との関係は険悪だったと言われています。その理由については諸説ありますが、この間、柳田と徳川との間にはさまざまな人物が仲介役として立ち、石渡もその

一人でした。

柳田は、石渡宛ての書簡の中で、「本日(もつ)を以て稍強烈なる書状を議長二呈し置候(まうらう) 多分今頃ハ怒り且つ困り居らる、事と存候」(A)と徳川へ書簡を送ったことを報告し、「議長ニして最明白に小生ニ対し過を悔いらる、ならば其にてよろしく候」(B)と徳川の反省を望んでいます。

原口大輔著「徳川家達と柳田国男―「河井弥八日記」から見る柳田辞職問題―」(『史淵』153号、九州大学大学院人文科学研究院、2016)によると、柳田の部下で後任の書記官長となる河井弥八が残したメモに、柳田が徳川へ宛てた書簡に関するものがあり、徳川が補佐役として功績のある柳田を密かに排斥しようとしたり、河井ら書記官を執事のように使ったりすることに對して非難する内容だったとことです。柳田が徳川へ宛てた「強烈なる書状」は、両者の間に積もった確執が形に現れたものであり、また石渡へ宛てたこの書簡は、その関係のこじれを傍証するものとも言えるようです。結局、柳田はその年の暮れに貴族院事務局を去ることとなりました。

B
↓

免れまいか備中件は
 ては小生は早稲かな
 被官者も一歩不憚園
 満より泣き入る業を
 する道理なき事なり
 と之別。さうき條件
 るを求め居る所は
 紙長にて明白に
 對 退を悔つて
 は其の心もさうか
 先生よりこの建意は
 察す餘ある也。三河方
 こそ。日清と決意を
 果へりて紳士無之。一
 小生は一寸立て結
 構るも 打棄て置るも
 紙長の戒め退職かとお

構るも 打棄て置るも
 紙長の戒め退職かとお
 像する。節をききに
 ぬはるるま時節の具
 のは馬弁の如きもの
 上りの
 九月十七日
 柳田

石渡先生
 是

柳田国男 (1875-1962)
 明治8 (1875)年兵庫生まれ。農商務省入省後、法制局参事官を経て、大正3 (1914)年に貴族院書記官長に就いた。退官後は、東京朝日新聞社論説委員などを務めた。在官中から『遠野物語』を刊行するなど民間伝承研究に取り組み、日本民俗学を切り拓いた。昭和37 (1962)年死去。
 肖像写真の出典：『帝國貴衆両院寫真画帖』東京タイプ社 1917<AZ-244-M8>



石渡敏一 (1859-1937)
 安政6 (1859)年東京生まれ。司法官僚として、大審院検事、司法次官などの要職を担った。その後、第1次西園寺内閣の内閣書記官長、貴族院議員、枢密顧問官を務めた。法学博士。昭和12 (1937)年死去。
 肖像写真の出典：『貴族院要覧 昭和7年12月増訂 丙』貴族院事務局 1933
 (https://dl.ndl.go.jp/pid/1653724/1/99)



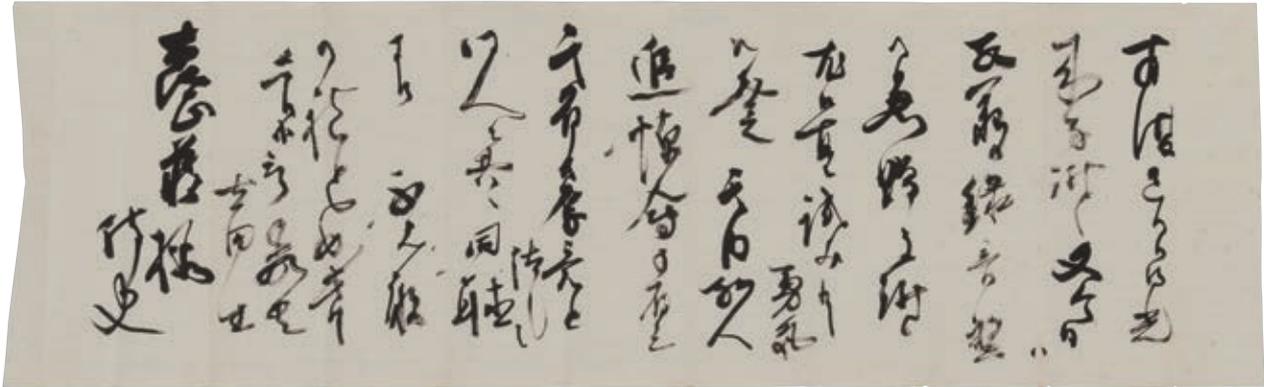


写真7 吉田茂書簡 森正蔵宛 (昭和27年) 6月23日 <森正蔵関係文書53>

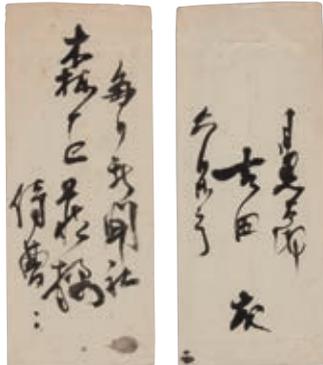


写真7は、吉田茂(写真8)が森正蔵へ送った礼状です。「過日ハ御光来」「故翁の録音盤」と書かれていますが、これのみでは、その内容が分からず、封筒の表には切手や消印もないことから、当時吉田がいた目黒官邸から誰かに持たせたものらしく、年代推定も困難です。

幸いなことに、この書簡を含む森正蔵関係文書には、森による日記が残されていました。吉田が官邸にいた時期で日付周囲の記載を探してみますと、昭和二七(一九五二)年の六月二三日に「吉田首相から、古島翁演説音盤を贈ったのに対する礼状がとどいた。なかなか立派な書である」(写真9)との文章が見つかりました。そこで、日記をさかのぼってめくっていきますと、録音盤につい

もりしょうぞう 森正蔵関係文書

(七五点 令和四年一〇月公開)

て、六月二二日に「古島翁の蓄音器レコードをそれぞれ一組ずつ、吉田首相と緒方竹虎氏とに送付する。」といった記述が出てきます。六月一八日には、森を含めて数人が吉田に招待されていますので、「過日」はこの日のようです。その集まりは「まるで故翁の追想座談会の観になった」と、同年五月二六日に死去した古島一雄(写真10)——当時、吉田の指南番として知られていた人物——の思い出を含めて記しています。

手紙と日記など、旧蔵者の資料がまとまって遺っていたことによつて、資料の理解を進めることができたと一例です。

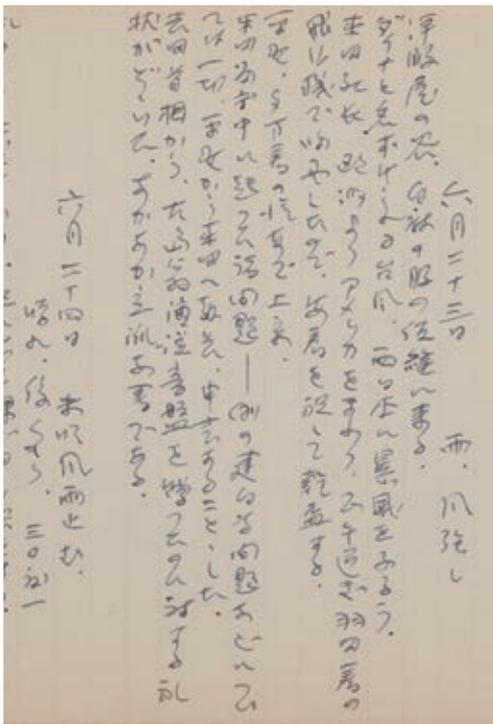


写真9 (日記) 昭和27年6月23日 <森正蔵関係文書42>



写真8 吉田茂 (1878-1967)
外交官・政治家
肖像写真の出典：「近代日本人の肖像」
(<https://www.ndl.go.jp/portrait/datas/350/>)



写真10 古島一雄 (1865-1952)
ジャーナリスト・政治家
肖像写真の出典：「近代日本人の肖像」
(<https://www.ndl.go.jp/portrait/datas/392/>)

森正蔵 (1900-1953)

明治33(1900)年滋賀生まれ。大正13(1924)年に東京外国語学校露語学科卒、大阪毎日新聞社に入り、昭和10(1935)年にモスクワ特派員、帰国後は同社の外信部ロシア課長となり、ソビエト通として講演や執筆を行う。のちに、論説委員、社会部長、出版局長等を歴任。戦後に執筆した『旋風二十年：解禁昭和裏面史』上下(鱒書房、昭和20-21)はベストセラーになる。昭和28(1953)年死去。

肖像写真の出典：〔日記〕<森正蔵関係文書42>



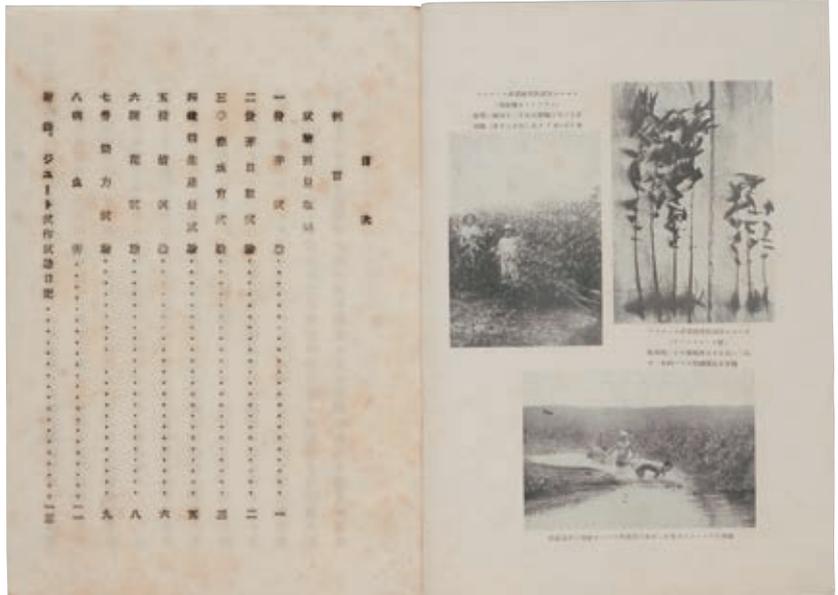


写真11 アマゾン産業研究所研究報告 第壹輯 大アマゾンニ於ケルジュートニ関スル試験研究<上塚司旧蔵文書2018>

上塚司 (1890-1978)

明治23 (1890)年熊本生まれ。南満洲鉄道株式会社社員、衆議院議員を経て高橋是清の秘書官となり、農商務、商工、大蔵各大臣時の政務を補佐。戦後は第1次吉田内閣大蔵政務次官、衆議院外務委員長、アマゾン産業研究所長、日本高等拓殖学校長、日伯中央協会理事長等を歴任した。同じく日本人のブラジル移住にかかわったことで知られる上塚周平は、従兄にあたる。



肖像写真の出典：『衆議院要覧 下巻』衆議院事務局1920
<https://dl.ndl.go.jp/pid/1337693/1/129>

うえつつかさ
 上塚司旧蔵文書 (追加分)
 (二三六点 令和五年一月公開)

上塚司は、衆議院議員を務め、高橋是清の秘書官として国政にかかわる一方で、遠く離れたブラジルのアマゾン地帯開発に情熱を傾けました。

写真11は、上塚がブラジルに設立したアマゾン産業研究所が作成した、ジュート(黄麻)の栽培に係る研究報告です。アマゾン産業研究

所では、コーヒーを梱包する麻袋の素材であるジュートがインドから輸入されていることに着目し、ブラジル国内での栽培を試みました。その後、アマゾン地域では、ジュートの栽培だけでなく、品種改良にも成功します。今回追加でご寄贈いただいた資料には、戦後に移住関連団体の関係者として入手した資料も含まれています。書き込みがところどころ見られる(写真12)ことから、冷めることのない南米移民事業への熱意が感じられます。

明治時代以降、日本人はアメリカ、ハワイなどへ盛んに移住する一方で、現地住民との摩擦を引き起こします。そこで、一九〇〇年代頃から、移住を後押しした政治家・実業家や日本人移住者に移住先候補の一つとして次第に注目されたのがブラジルでした。国内の人口が増え続ける中、日本人が海外での就業を志していた時代は、人口減少を迎えた現代日本からみれば隔世の感があるかもしれません。時代の雰囲気の一端を現在の私たちに伝えてくれるのは、こういったひとつひとつの資料なのです。

英	140,900	162,900
国	544,703	501,652
計		

Handwritten notes in Japanese: Brazil, Portugal, etc.

写真12 『海外移住研究』第2号 昭和34年 <上塚司旧蔵文書2085>
 12ページの「第3表 ヨーロッパ国別出移民数(1956・57年)」の下の書き込み

国際子ども図書館展示会「おいしい児童書」

みんな！ 食べて生きている

地球上には数多くの国と地域があり、多種多様な文化が花開いていますが、実は共通項があるのです。それは、「食」です。「食」と無関係に生きている人は、地球上には存在しないと言ってもよいでしょう。

この人類共通の「食」というテーマは、児童書でも広く取り上げられています。よく知られている日本の作品を始め、海外の作品においても、食べることの喜びや幸せが描かれるだけでなく、食物連鎖、摂食障害、家族構成の多様化、人類の活動の地球環境への影響など、「食」を通して見えてくる現代社会の諸課題も取り上げられています。

本展示会では、まず、第1章「つくる」第2章「たべる」で、大地で栽培される食材、食材を買いに行くこと、食材を調理すること、料理を食卓に並べて味わうことを描いた作品を紹介します。そして、第3章「かんがえる」では、人体や社会、地球環境といった様々な視点から「食」に関する課題を意識した作品を取り上げます。

第1章 つくる

種をまいて農作物を収穫したり、市場で食材を買ってキッチンで調理したり、「つくる」ことに着目します。

大地のごちそう

野菜や果物には、農家の人々のたくさんの手間と苦勞がつまっています。育てる労力が大きいほど、収穫の喜びはひとしおです。たくましく育ち、豊かに実る農作物が、児童書においても数多く取り上げられています。

お買い物へ行こう！

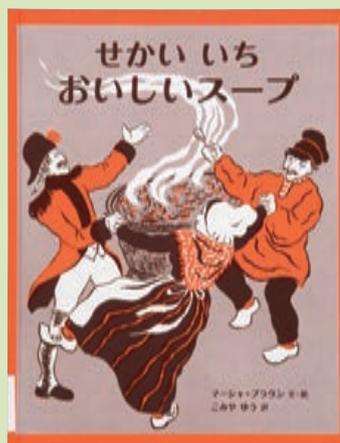
お店や市場での食べものの売り買いは、生活に必要であるだけではありません。楽しみや発見を与えてくれる、心躍る体験なのです。

キッチンの風景

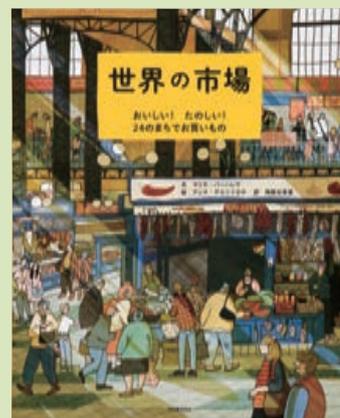
作り手たちが腕をふるい、「つくる」ことの楽しみ、誰かと協力することの喜びを教えてください。国や地域に根付いた調理方法を若い世代や異なるルーツを持つ人たちに伝える作品もあります。



『おおきなかぶ』
A.トルストイ 再話, 内田莉沙子 訳, 佐藤忠良 画
福音館書店 1966 【Y18-M98-330】



『せかいいちおいしいスープ: あるむかしばなし』
マーシャ・ブラウン 文・絵, こみや ゆう 訳 岩波書店 2010
【Y18-N10-J163】



『世界の市場: おいしい! たのしい! 24のまちでお買い物』
マリヤ・パーハレワ 文, アンナ・デスニツカヤ 絵, 岡根谷実里 訳 河出書房新社 2022 【Y1-N22-M363】

第2章 たべる

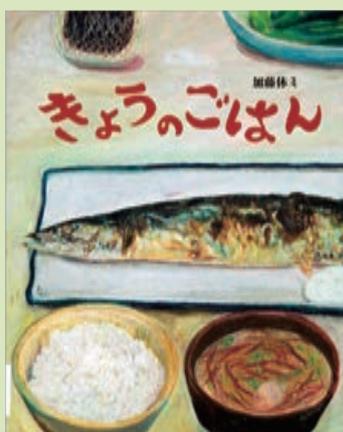
「たべる」ことは、生きるために必要不可欠な行為です。それだけではなく、家族や友人と食卓を囲むことは空腹を満たす以上の意味を持ちます。ふだんの食卓に並ぶ料理やお菓子、特別な日を彩る食べものを描いた作品を取り上げます。

食卓の風景

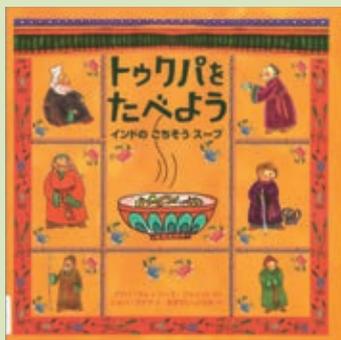
食卓を彩るおいしい食べものと、食べものを分かち合う様子が描かれます。家族や友だち、時には出会ったばかりの相手とともに食卓を囲むことは、互いの絆を深めるきっかけとなります。

特別な日

お祭りや、儀式、行事には、それにちなんだ食べものがつきものです。年末年始のお祭りや大地への感謝をこめたお祝い、亡くなった人を想う儀式など、特別な気持ちのこもった食べものが描かれます。



『きょうのごはん』
加藤休三 作 偕成社 2012
【Y17-N12-J937】



『トゥクパをたべよう：インドのごちそうスープ』
プラバ・ラム、シーラ・プルイット ぶん、シルパ・ラナデエ、あまがいはるみ やく イマジネーション・プラス 2020 【Y18-N20-M241】



『おちやのじかんにきたとら』
ジュディス・カー 作、晴海耕平 訳
童話館出版 1994 【Y18-10199】



国際子ども図書館では、10月1日から12月24日まで、展示会「おいしい児童書」を開催しています。ここでは、この展示会の概要をご紹介します。

開催日：2023年10月1日(日)～12月24日(日)
会期中の休館日：毎週月曜日、国民の祝日・休日、毎月第3水曜日（資料整理休館日）

開催時間：9時30分～17時
会場：国際子ども図書館 レンガ棟3階 本のミュージアム
入場料：無料

※【 】内は国立国会図書館請求記号。本稿に掲載するものはすべて国際子ども図書館所蔵。

第3章 かんがえる

「つくる」「たべる」の後に、食について「かんがえる」章を設けました。「つくる」こと「たべる」ことを、異なる側面からとらえてみます。

「たべる」とどうなる？

生き物は、「たべる」ことで栄養を得て成長し、活動しています。体内の微生物から生態系における生命のサイクルまで、食べた後の世界に目を向けます。

「たべない」「たべられない」

世界には、「たべない」ことが生活に根付いている国・地域があります。一方で、様々な理由で「たべられない」人たちもいます。その背景には何があるのでしょうか。

家族と食卓

誰とどのように食卓を囲むのかは、暮らす国・地域の食文化や信仰する宗教によって異なります。様々な家族が登場する作品から、家族と食卓の多様性を紹介します。

食べものが届くまで

食べものが食卓に届くまでに、多くの人々が関わっています。食べものを扱う技術も進化してきました。

「どん欲」と地球

生物多様性の危機に直面する現在、持続可能な成長が提唱されています。児童書の中でも、人間の「どん欲」に対する警鐘が鳴らされているのです。



『はらべこあおむし』
エリック・カール さく、もりひさしやく
偕成社 1989 【Y18-N05-H98】



『からあげビーチ』
キリーロバ・ナージャ さく 古谷萌
と五十嵐淳子 え文響社 2021
【Y2-N21-M144】



『もったいないばあさん』
真珠まりこ作・絵 講談社 2004
【Y17-N04-H1145】

このほか、次のようなトピックについて描かれた作品を集めたコーナーを設けています。

飲みもの

実は食べものよりも口にする機会が多いです。

道具

「食」には道具が不可欠です。

食べられてしまう

食べる側だと思っていた登場人物が食べられる側になるお話はいかが？

ファンタジーの食卓

ファンタジー作品にも「食」が取り上げられています。

アートな食べものの絵本

食べものをテーマにした芸術性に富む作品たち。



『ぐりとぐら』
なかがわりえこ、おおむらゆりこ [著]
福音館書店 1963 【Y17-M98-793】



『フルーツちゃん!』
ハミード・トラーパーリー 作, ジャアファ
ル・エブラーヒーミー 文, 愛甲恵子
訳 ブルース・インターアクションズ
2006 【Y18-N06-H403】

本展示会では、国際子ども図書館で所蔵する約160の国と地域の児童書の中から、「食」に関わる児童書約240点を展示します。みなさんがよく知っている児童書についても、「食」というテーマを通して、新しい発見があると思います。「食」をキーワードに、児童書で世界をめぐる旅へと出かけてみましょう！

関連講演動画配信

「絵本に描かれる食べもの—異文化理解、暮らし、ジェンダーの視点から—」

10月1日（日）、龍谷大学短期大学部准教授の生駒幸子氏を講師にお迎えし、絵本に描かれる食べものについて、異文化理解、暮らし、ジェンダーの視点から読み解いていただく講演会を開催しました。12月24日（日）まで、事前に収録した動画をYouTubeの国立国会図書館公式チャンネルで公開しています。文化・時代を超えて読み継がれる、食べものが描かれる絵本の魅力を一緒に探ってみませんか。

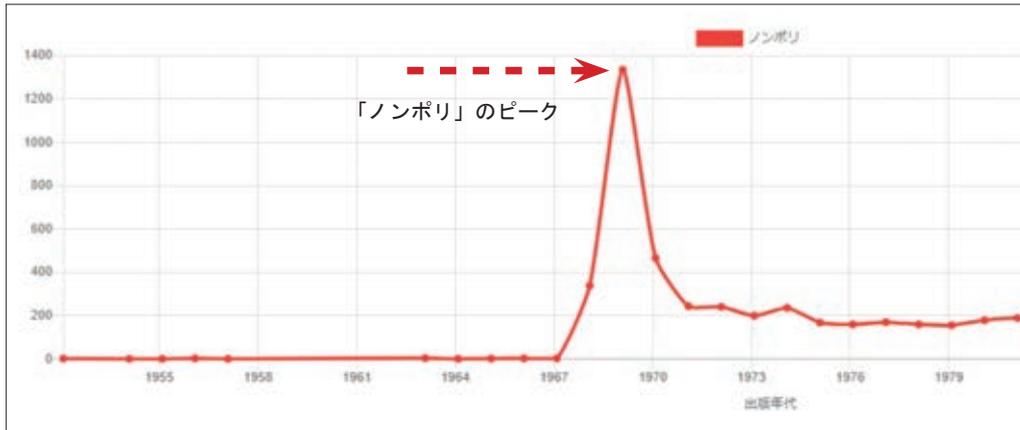
<https://www.kodomo.go.jp/event/event/event2023-10.html>



生駒幸子氏

第2回
「ノンポリ」と
非政治

図1 「ノンポリ」の検索結果 検索対象：雑誌



▲検索対象：雑誌



佐藤 信
SATO Shin

東京都立大学法学部准教授
(現代日本政治・日本政治外交史)
空間やジェンダーに着目して日本政治を研究している。著書に『鈴木茂三郎 1893-1970—統一日本社会党初代委員長の生涯』(藤原書店)、『60年代のリアル』(ミネルヴァ書房)、『日本婚活思想史序説』(東洋経済新報社)、『近代日本の統治と空間 私邸・別荘・庁舎』(東京大学出版会)がある。

国立国会図書館は、デジタル化された資料を対象に、OCR技術を用いたテキストデータ化を進めています。本連載では、作成されたテキストデータの中での語彙の出現頻度を視覚化できるNDL Ngram Viewerを活用して、出版物の中の語彙の使われ方を考えます。第2回目は、日本政治の専門家から寄稿いただきました。

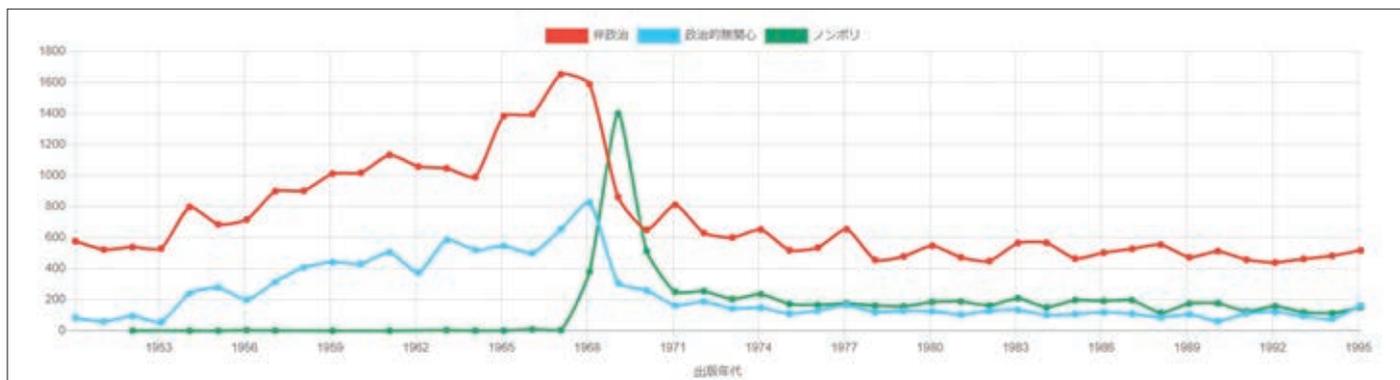
ある事象がどれくらい流行っていたのか、実証的に示すことは難しい。2004年以降であれば、トピックの検索数の推移を見せられるGoogle Trendsという便利なツールがある。時代を遡るとなると、グーグルが電子化した本への語句の出現回数の推移を見せられるGoogle Books Ngram Viewerがあるが日本語は対象外。そんなところに、2003年以前の日本語について一定程度これを可能にしてくれたのがNDL Ngram Viewer (NNVと略す)である。

一例を紹介しよう。3月にポストンで開かれた国際学会で、「ノンポリ」の歴史をたどる報告にコメントする機会があった。海外の報告者は「ノンポリ」という言葉が現在まで使われていると考えていたよいうのだが、現在日本に住む多くの人にとっては聞きなれない言葉だろう。では、どのくらいの時期に

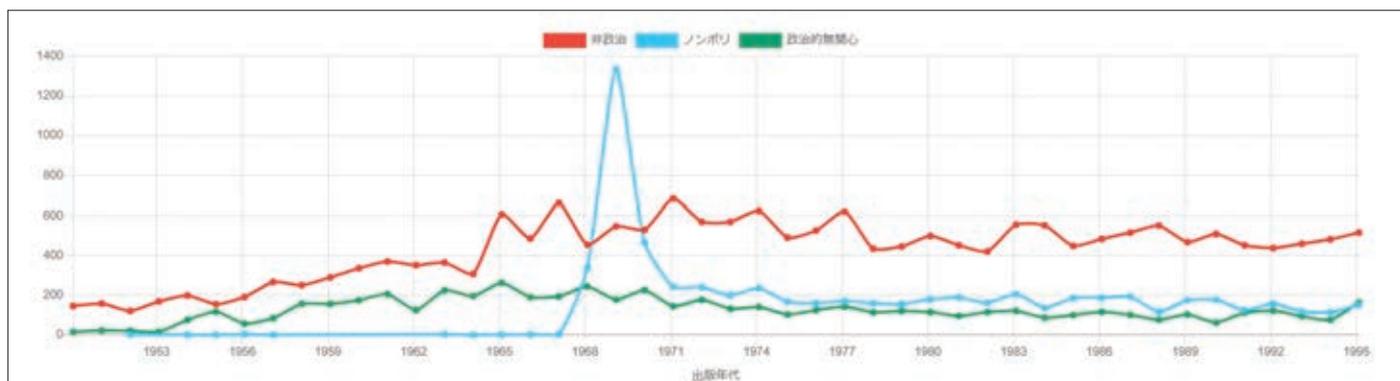
盛んに使われたのだろう。すぐさまNNVを開いて「ノンポリ」と打ち込むだけで、大学紛争の1960年代末にこの単語が盛んに使われたことを確かめることができた「図1」。言うまでもなく、セクト化していく大学紛争のなかで、それから距離を置く学生たちを指す言葉として用いられたのである。

NNVの威力はここで終わりではない。ここに数がかウントされているということは、該当箇所を国立国会図書館デジタルコレクション(デジコレ)で——当該資料の公開範囲によっては自宅にいながらにして——閲覧できるということである。そこでデジコレで見ると、60年代より前にも「ノンポリ」という言葉はわずかに使われていて、しかも違った意味を持っていたことが分かってきた。たとえば52年には、当時まだ学習院大学に在学中だった武者小路公秀(国際政治学者1929〜2022)が「全パル(全然パルタイ=共産党员)」と対比して「ノン

図2 「非政治 / 政治的無関心 / ノンポリ」の検索結果



▲検索対象：図書・雑誌



▲検索対象：雑誌

「ノンポリ」という語を用いている（『声』896号）。全共闘など新左翼の学生たちが共産党を批判していた60年代末とはまったく違って、共産党員であることが最も政治的だと捉えられていたのである。実は「ノンポリ エステル」のような言葉もヒットしてしまっていることが分かったりするので、NNVを使ったあとにデジタルで用例を確認することは必須だ。

このようにNNVはおおまかな雰囲気や即座かつ直観的に掴み、さらに調査を進めるのに強力なツールだ。ただ、文字認識結果に誤りがあるほか、デジタル化された図書・雑誌のみが対象である点には注意して欲しい。たとえば、以前60年代を研究していた筆者としては、大学紛争前には「ノンポリ」という言葉はほとんど使われていなくても、「非政治(的)」や「(政治的)無関心」という似た言葉がよく使われていたことを知っている。そこで「非政治/政治的無関心/ノンポリ」を打ち込んでみると、あたかも「非政治」や「政治的無関心」に代わって「ノンポリ」という言葉が登場したかのような結果が出てくる【図2(上)】。

ただし、ここで「非政治」や「無関心」が急減しているように見えるのは見せかけに過ぎない。雑誌データは90年代までたっぷりと入っているのだが、図書のデータが69年から急減するためにデータの総量が減少したのである。そこで60～70年代の推移をみるときは雑誌のデータに絞って検索するとよい。こうすることで、政治的に無関心な層について調べたいなら、「ノンポリ」という言葉より「非政治」や「無関心」といった言葉をキーワードにして調査を進めた方がよさそうなのも分かってくる【図2(下)】。手軽だけれど強力なこのツールが、興味本位でも、研究のお供としても、広く利用されることを願ってやまない。

博士論文デジタル化の片隅で



酸性紙の封筒に収納されていた博士論文。
右下は取り除かれたステープラーの針。

京都府精華町にある関西館では、大正12（1923）年以降に学位を授与された、およそ60万件的日本の博士論文を所蔵している。文部省で保管されていた博士論文が昭和10（1935）年に帝国図書館に移管されて以降、継続して同館で受入れ、戦後は当館に引き継がれた。国内の博士論文をほぼ網羅する貴重なコレクションである。

1件の博士論文は、複数の主論文や副論文、参考文献で構成されていることも多い。当館では、散逸しないように1件ずつ封筒に入れて保存している。上製本、こよりやステープラー留めの手書き原稿、雑誌の抜き刷りなど多種多様な形態がある。さらに、古い博士論文の中には、判型の違う用紙を一緒に綴じ込んだもの、横綴じと天綴じを一緒にT字状に綴じ込んでしまったものなども見られる。戦後間もない帝国図書館時代末期には、混乱の中、二つ折りや紐で縛った状態のまま、床に積み上げられていたこともあったという。戦後直後ぐらいまでのものは酸性紙も多く、劣化が進んでいる。保存と利用の両立のため、デジタル化は急務で、現在その準備作業を行っているが、こ

れがなかなか気の遠くなるような作業である。

作業は、封筒から資料を取り出し、冊数を確認するところから始まる。1枚1枚ページをめくって撮影サイズや撮影予定枚数を記録しつつ、破損や劣化の状態を確認する。そして、スキヤニングしやすい状態に整えていくのだが、破れていたたり、茶色く変色して触れると木の葉のように割れていたりするものもある。シミやカビの跡が残っている、図版として貼られた写真同士がくっついて、折り癖が戻らない、ステープラーの針やクリップが錆びついて紙を傷めている、等々、劣化の状況もまた多種多様である。破れは補修し、カビの痕跡は紙が傷まないようにそっと拭く、剥がれ落ちた写真は糊で貼り直す、圧して平らに伸ばす、錆びた針やクリップは取り除いてステンレス針や糸で留め直す……

デジタル化を進めることによって、先人の貴重な研究成果がより多くの方々に活用されることを期して、今日もひたすら錆びた針を抜き続けるのである。

（文献提供課 閲覧係 錆山）

本屋に

ない

本



蘭字 知られざる 輸出茶ラベルの世界 齋田記念館特別展

齋田記念館 編・刊
2020.8 81p; 26cm
<請求記号 DH432-M47>

安政6(1859)年の開港以降、

日本と海外との貿易が拡大していきま
す。幕末期の日本の輸出品は、第1位
が生糸であり、第2位がお茶でした。
明治期にも、政府が茶の輸出を奨励し
たこともあり、各地で茶が生産され、
海外市場へ輸出されました。

本書は、東京都世田谷区にある齋田
記念館の特別展「蘭字―知られざる輸
出茶ラベルの世界―」の図録です(特
別展は、新型コロナウイルスの流行拡
大による延期を経て、2021年に開
催されました)。タイトルの「蘭字」
とは、輸出用茶箱の側面に貼られたラ
ベルの総称です。蘭字には、茶の種類
やブランド、等級、産地、輸出商社な
どが主にアルファベットで記載される

とともに、さまざまな絵柄が描かれて
いました。

蘭字の魅力の一つは、その美しいデ
ザインです。桜や富士山、人力車や着
物姿の女性など、日本をイメージさせ
る絵柄が、色鮮やかに描かれています。
他方、輸出先の米国やカナダなど、な
じみのある、西洋の建築物や飛行機、
トランプなども、描かれています。よ
く見てみると、文字の書体や四方を囲
む飾り罫なども、緻密でユニークです。
本書全体を通して、蘭字の美しい世界
を楽しむことができます。

しかし、蘭字は、見て楽しいだけの
ものではありません。日本の茶輸出の
歴史を伝える、貴重な資料でもありま
す。第2章では、蘭字の記載から、現

在も茶の産地として著名な静岡県の他
に、三重県四日市市や新潟県村上市に
おいて、紅茶や緑茶が生産され、輸出
されていた歴史を読み取っています。

産地で生産された茶は、当初、横浜
や神戸などの居留地にあった外国商館
を通じて輸出されることが多かったよ
うです。第3章では、蘭字から読み取
れる、居留地の外国商館の沿革や活動
などが、詳しく描かれています。

茶の最大の輸出先は、世界最大の
コーヒー消費大国でもある米国でし
た。第4章や解説論文では、米国の博
物館や公共図書館に保存されていた蘭
字が取り上げられ、それらの資料など
から判明した研究成果などが記されて
います。

また、第8章では、蘭字の話に加え

て、今日の齋田記念館につながった齋
田家が、現在の世田谷区の地域で茶園
を営んでいたことなどを紹介していま
す。米国における「廣茶輸入禁止条令」
制定への対応としての茶業組合の設
置、製茶技術向上の取り組みなど、茶
業界全般にも関わる興味深い内容が含
まれていきます。

本書は、蘭字というものを通して、
日本の茶輸出の歴史を鮮やかに描き出
しています。お茶が好きな方から、歴
史やデザインに興味がある方まで、多
くの方に楽しんでいただける内容で
す。ぜひ手に取ってみていただきたい
1冊です。
(杉野晟也)

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。
このコーナーでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介します。

韓国国立中央図書館との第23回業務交流

7月24日から29日まで、国立国会図書館において韓国国立中央図書館（NLK）との業務交流が行われ、NLKからイ・スミョン（李樹明）知識情報運営部長を団長に、チェ・ユンギョン（崔允瓊）知識情報管理部国家書誌課司書事務官、イ・ヨンス（李演洙）知識情報管理部資料保存研究センター学芸研究士の3名の代表団が来日しました。

東京本館では、まず基調報告として、両館の現況と課題について双方から報告しました。次の「次世代書誌言語の導入」をテーマとするセッションでは、韓国からは「国家書誌2030」計画について、当館からは「国立国会図書館書誌データ作成・提供計画2021-2025」について報告しました。さらに、「デジタル資料の長期保存」をテーマとするセッションでは、韓国からは、所蔵するデジタル媒体の状態評価及び保存処理や、長期保存戦略について、また、当館からは、デジタル資料の長期的な保存と利用のための取組について報告しました。各セッションの質疑応答では、両館の今後の課題や展望に関し活発な意見交換が行われました。

その後、関西館に場所を移して業務懇談を行いました。



韓国国立中央図書館代表団と基調報告出席者

第16回科学技術情報整備審議会

8月2日、第16回科学技術情報整備審議会がハイブリッド方式で開催され、審議会委員11名のほか、館長、副館長、幹事等職員16名が出席しました。

当館から「第五期国立国会図書館科学技術情報整備基本計画」の進捗について報告した後、質疑および懇談が行われました。懇談では、黒橋委員から生成AIについて、竹内委員長代理からオープンサイエンス時代における大学図書館の在り方について、それぞれ話題提供していただきました。委員からの主な意見は次のとおりです。

・デジタル化資料の大幅な追加提供や全文テキストの検索の本格実施など、計画の大きな進捗が確認できた。国民の知識基盤として一層の進展を図りながら、教育機関等での利活用方法の提案などの取組にも期待したい。

・情報化から更に進んだ知識化の時代を迎えており、デジタルアーカイブと生成AI等の新しい技術は、その基盤に不可欠な要素である。これからの図書館の在り方を見据えた検討を行うとともに、図書館は、人びとがその知識基盤を使いこなすためのリテラシーを培うために、積極的に貢献していただきたい。



第16回科学技術情報整備審議会

科学技術情報整備審議会委員名簿

(五十音順 敬称略) (令和5年8月2日現在)

委員長

安浦 寛人 九州大学名誉教授/福岡アジア都市研究所 理事長

委員長代理

竹内 比呂也 千葉大学副学長

委員

浅川 智恵子 日本科学未来館館長

大隅 典子 東北大学副学長、附属図書館長、大学院医学系研究科教授

奥野 真 文部科学省大臣官房審議官(研究振興局及び高等教育政策連携担当)

黒橋 禎夫 情報・システム研究機構国立情報学研究所 長

小口 正範 日本原子力研究開発機構理事

佐藤 義則 東北学院大学文学部教授

戸山 芳昭 国際医学情報センター理事長

橋本 和仁 科学技術振興機構理事

藤垣 裕子 東京大学理事・副学長、大学院総合文化研究科・教養学部教授

村山 泰啓 情報通信研究機構NICTナレッジハブ・研究統括、ナレッジハブ長

渡部 泰明 人間文化研究機構国文学研究資料館長

*審議会に関する情報は、左記に掲載しています。
ホーム▽事業紹介▽資料の収集▽科学技術情報整備▽科学技術情報整備審議会
<https://www.ndl.go.jp/collect/tech/council/index.html>



第38回納本制度審議会および第18回納本制度審議会代償金部会

9月1日、第38回納本制度審議会および第18回納本制度審議会代償金部会が開催されました。

審議会には委員12名が出席し、令和5年7月1日付けで、委員の委嘱および代償金部会に所属する委員の指名が行われたことが報告され、斎藤誠委員が互選により会長に選出されました。斎藤会長は、田村善之委員を会長代理に指名しました。また、事務局から、出版物納入状況、オンライン資料収集制度の運用状況について報告を行い、質疑応答がありました。

審議会終了後に開催された代償金部会には委員6名が出席し、奥郵弘司委員が互選により部会長に選出されました。奥郵部会長は、江上節子委員を部会長代理に指名しました。

納本制度審議会委員名簿

(五十音順 敬称略) (令和5年9月1日現在)

会長

斎藤 誠 東京大学大学院法学政治学研究科教授

会長代理

田村 善之 東京大学大学院法学政治学研究科教授

委員

伊藤 真 弁護士

江上 節子 武蔵大学名誉教授

江草 貞治 株式会社有斐閣代表取締役社長

奥郵 弘司 慶應義塾大学大学院法学研究科教授

小野寺 優 一般社団法人日本書籍出版協会理事長

近藤 敏貴 一般社団法人日本出版取次協会会長

柴野 京子 上智大学文学部新聞学教授

仲俣 暁生 大正大学表現学部表現文化学教授/公益社団法人日本文藝家協会知的財産権委員

中村 史郎 一般社団法人日本新聞協会会長

根本 彰 東京大学名誉教授

堀内 丸恵 一般社団法人日本雑誌協会理事長

村松 俊亮 一般社団法人日本レコード協会会長

山崎 隆広 群馬県立女子大学文学部文化情報学教授

○代償金部会所属委員

奥郵弘司(部会長)、江上節子(部会長代理)、伊藤真、小野寺優、根本彰、堀内丸恵、村松俊亮

*審議会に関する情報は、左記に掲載しています。

ホーム▽資料の収集▽納本制度▽納本制度審議会

<https://www.ndl.go.jp/collect/deposit/council/index.html>



NDL Topics

新刊案内

令和4年度国際子ども図書館児童文学連続講座講義録
「子どもに本を手渡す―児童文学基礎講座―」

子どもの本の現在（いま）―何をいかに選ぶか
日本児童文学の現在―サステナブルに生きさせられる子ども

海外児童文学の現在―「人種・民族」「階級・階層」「ジェンダー」から考える子どもの本
絵本の現在―普遍性と現代性を考える
国際子ども図書館のサービス紹介



A4 120頁 年刊 1,980円（税込）
ISBN 978-4-87582-915-7
発売 日本図書館協会

外国の立法 立法情報・翻訳・解説 第297号

アメリカの大統領政権移行法
EUの最低賃金指令
2022年イタリア上院規則改正―議員定数削減への対応等―
スウェーデンの緊急事態法制―戦争等の場合を中心に―

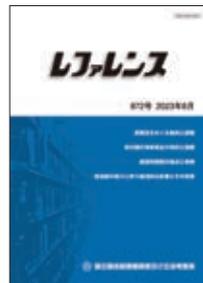


A4 127頁 季刊 1,980円（税込）
ISBN 978-4-87582-918-8
発売 日本図書館協会

レファレンス 872号

景観法をめぐる動向と課題
我が国の海岸保全の現状と課題―砂浜の保全を中心として―

超過利潤税の論点と事例
宿泊税の導入に伴う経済的な影響とその背景



A4 103頁 月刊 1,100円（税込）
発売 日本図書館協会

レファレンス 873号

サービス貿易の動向とその背景―1996～2022年―

主要国における違憲審査機関の構成員の選任―最高裁判所・憲法裁判所裁判官等を対象として―

英国の大臣規範の動向―2022年の改定を中心に―
国家公務員の官民人事交流―制度及び実態の日独比較―



A4 82頁 月刊 1,100円（税込）
発売 日本図書館協会

カレントアウェアネス 357号

マインドフルネスと図書館…米国における動向
セーフィネットとしての公共図書館…米国・英国の取り組み事例から

グループ討議を中心としたオンライン研修の事例報告…国立情報学研究所「大学図書館員のためのIT総合研修」

△動向レビュー▽

査読は無償であるべきか？

自治体発行オンライン資料の収集…近年の公立図書館の取組を中心に

△研究文献レビュー▽

日本の公立図書館における経営形態…2016年以降の動向を中心に



A4 32頁 季刊 440円（税込）
発売 日本図書館協会

入手のお問い合わせ

日本図書館協会

〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14

電話 03(3)523(0)812

11

NATIONAL
DIET
LIBRARY
MONTHLY
BULLETIN
2023.11

NO.751

NOVEMBER
2023

CONTENTS

- 01 <Book of the month - from NDL collections>
Twenty Thousand Leagues Under the Seas and Plato's Atlantis
- 05 An interview with historian TORIUMI Yasushi:
Researching and editing the papers of ITO Hirobumi
- 18 Materials newly available in the Modern Japanese Political History
Materials Room
- 26 ILCL exhibition "Yummy Children's Books"
- 30 <Using NDL Ngram Viewer>
(2) Graphing the occurrence of Japanese words with similar
meanings: *Nonpori* and *hiseiji* SATO Shin
- 32 <Tidbits of information on NDL>
Digitizing doctoral dissertations
- 33 <Books not commercially available>
Ranji: Shirarezaru yushutsucha raberu no sekai: Saita kinenkan tokubetsuten
- 34 <NDL Topics>

国立国会図書館月報

令和5年11月号 (No.751)

令和5年11月1日発行

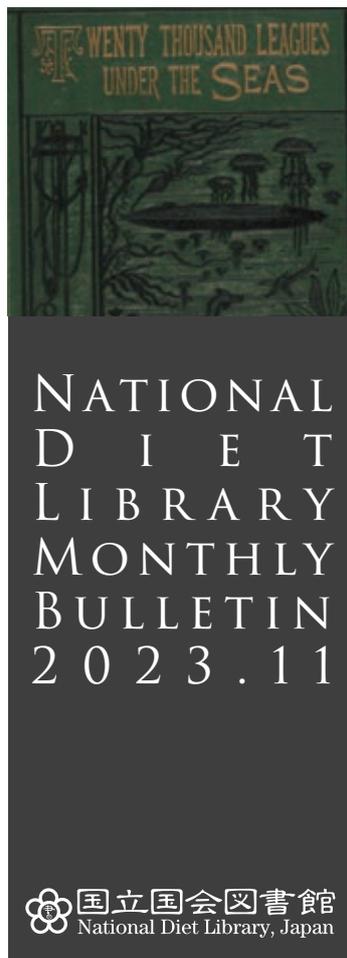
発行所 国立国会図書館

編集者 川西晶大

印刷所 株式会社丸井工文社

〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話 03 (3581) 2331 (代表)
FAX 03 (3597) 5617
E-mail geppo@ndl.go.jp
<https://www.ndl.go.jp/>

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。
本誌に掲載された記事を転載する場合（全文または長文にわたり抜粋する場合、または図版を転載する場合）には、
事前に当館総務部総務課にご連絡ください。
本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ（<https://www.ndl.go.jp/>）>刊行物>国立国会図書館月報でご覧いただけます。



図

国

国

書

人

士